

---

# 僕の彼女は極道さん .

伊藤勇作

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の彼女は極道さん

### 【Nコード】

N7548C

### 【作者名】

伊藤勇作

### 【あらすじ】

僕の名は月見優貴、高校2年生だ。平凡な日々を送っていたはずなのに……。いつの間にか色々な人が集まっちゃって……。え？僕の彼女？いつの間に！？しかもその子って極道さんの娘！？これじゃあ、僕の身が持たない！！

## プロローグ（前書き）

どうも。はじめましての方、お久びりの方。

毎度？お馴染みの伊藤です。

初めから訂正をして結構な時間がかかりました。

長かった…そして変わったなあ…と言えない。

確かに変わったといえる部分があるけど、殆どがわかっていないってどういうことだ…

と思いながらも、一応出来たのでそれはそれでよしとしよう（自己完結

また更新できるし、この作品を楽しんでいただければそれでいいと思える自分がいる。

なんというか単純だ…

ではまた長い付き合いになるかと思いますが、これからもよろしくお願いします。

## プロローグ

時代：中世欧州

\*\*\*\*\*

少年は周りを見渡す。

そこは荒れ果てた荒野。

崩れ果てた建物のなり果て…すべてが荒野の灰となっている。

理想の果てに求めた世界。

世界が人と獣の血で真っ赤な色に染め上げられ…

沢山の肉塊は生き物の為り果て…

人々の血に獣の血。

それらを斬り裂いた剣は血で汚れ、着ている服や壊れかけの甲冑は鮮血で紅く染め上げ、周囲は屍の臭いで充満している。

「……終わった、な」

周りを見渡すかぎり立っているのは自分のみ。

もともと味方など存在はしない。  
そう…存在するはずがない。

何故なら僕が国を裏切ったからだ。

王を阻む敵はすべて斬り、民を守るために剣を振う。

それが騎士だ。

…だが僕は違う。

国を捨て、民を捨て、全てを投げ捨て、彼女だけを守るために剣を振う。

騎士は戦うためにいる。

それ以外の価値はないし、僕はそのすべしか知らない。

呪いだろ？が運命だろ？がそんなこと知ったこっちゃない。

守る為に騎士がいるのだ。

なら、僕は彼女を守るために剣を振う。

それが僕が選んだ道。

たとえ最後になろうとも戦い抜いてみせる。

それが僕の意味だから…その結果がどんな悲惨な未来になろうとも…だ。

「……まだ来るか」

前を見ればいやでもわかる沢山の軍勢。

「五千…六千…いや、九千はいるな」

先ほどの戦いで魔力を消費し全ての力を使い果たした今、この軍勢を止めるすべはない。

…王よ…僕と彼女を抹殺するだけなのにこんなに送り込むことはな  
かろうに…

「そもそも放っておけばよいものを…」

そんなに彼女が憎いのか…いや、裏切った僕が憎いのかもしれない。

「だが…こちらにも負けられない」

そう負けてはならない。

負けたら彼女の身が危ない。

…けど、今の僕では勝てる余力もない。

「…なら簡単な話だ」

負けるくらいなら数多くの敵を道ずれにする。

…いや、全ての敵を道ずれにしてみせる。

「それが唯一僕に出来ることだ」

残りの魔力を剣に集中させる…イメージは刃、全ての敵を切り裂く刃。

「さあ…これで終わりにしよう。僕もお前たちも…」

剣を振りかぶり、敵の陣へと歩を進める。

「でも…贅沢をいうなら」

…また彼女に会いたかった。

叶わぬ願いを胸に抱き、敵陣に突っ込む。

さらば愛しき人よ…次は穏やかな時代で逢いましょう。

そして少年は敵の中へと消えていった。

それが英雄と呼ばれた少年の最後だった。

## 第巻話：いつもの日常？

時代：現代

\*\*\*\*\*

時刻は午前5時、まだ起きている人も少ない時間帯。  
そんな中、一人の少年は悩んでいた。

「……………」

台所に立っている姿は何かを料理する様子ではあったが…

「…材料がない」

ある意味深刻な悩みであった。

「これはピンチだな」

少年にとって、これはかなり重要らしい。

「これじゃあ、お昼の弁当と晩ご飯が無いな…」

だが、無い物は仕方がない。

「仕方がない、今日は昨日の残りで、後は帰りにでも」



そう思っ て仕度に掛かるうとしたが…

「ねえ、優にい…」

いきなり後ろから声をかけられた。

そこにはちよつと暗い雰囲気だが、かなり可愛い子がいた。

身長は僕と殆ど変わらないくらいで、髪は長く黒い、そして前髪が完全に両目を覆っていた。

ちよつとビックリしたが、いつもの事なので気にしないで言った。

「どうしたの皐月、何か用か？」

「優にいが何かブツブツ言っ てたから…」

なるほど、聞こえてたのか。

「いや、別に気にしなくていいよ」

そう言っ て、また仕度に掛かるうとしたが…

「優にい…私に出来ることがあるなら……言っ てね」

そう後ろから囁かれた。

身長は僕と殆ど変わらないので、その囁きが僕の耳元で聞こえる。

…ちよつと恥ずかしい。

だけど、それよりも嬉しい。

「うん、分かつ たよ」

「…そう…じゃあ、後で…」

そう言つて、二階の自分部屋に行つてしまった。

そう言えば朝から忙しかったから自己紹介が遅れてしまったな。

僕の名は、月見 つきみ 優貴 ゆうき

高校二年生。

こんな女子みたいな名前だが、僕は男で。

身長は165cmとちよつと低め…かな？

特徴はこれと言つて無いが、眼鏡を掛けている…ってこれって特徴かな？

髪の色が少し白いのが特徴だ！（普通はこれ特徴だよな）

あと、少しだけ合気道が出来るくらいかな？

そして先ほどの女の子は、月見 つきみ 皐月 さつき

高校一年。

僕の自慢の妹だ。ちよつと暗い感じだが、とっても優しい子だ。

それによくもてる。

可愛いからかな？ だけど悉く振 ふる っている。

細かな理由は聞いても教えてくれなかったが、今は別に付き合つ気は無いらしい。

因みに、僕等の両親は5年前…とある事故で他界してしまったため、今はご近所さんに少し厄介になつている。

そして、二人でこの家で暮らしている。

料理は二人ともするが、皐月は部活に入っているため専ら僕の仕事だ。

そして今、朝ご飯を作っている所である。

「やっぱり日本人は朝はご飯とみそ汁だな」

まあ、昨日の残り物だけど。

そしてこの時間帯になると…

「…………おはよう、優にい」

学校に行く仕度をした皐月が二階から降りてきた。

「おはよう、忘れ物無いか？」

「…………うん」

こくりとうなずく皐月。

「…優にいても…準備しないと…」

そうだった、自分の事をすっかり忘れてた。

「じゃあ、先行ってていいよ」

「…わかった」

そして僕は二階の自分の部屋に……

「……………」

…僕の部屋のベットに誰か寝てるんですけど。

まあ大体は予想がつくが、一応確認のため、ベットから布団をどか

すと…

「おはよう！ 優貴」

そこにはとても綺麗な人がいた。

「…龍之さん、こんな所で何やってるの？」

彼女は龍之<sup>りゅうの</sup> 由美<sup>ゆみ</sup>

僕と同じクラスで、かなりの美人だ。

黒く長い髪を後ろで纏め、整った顔立ちに鋭い目つき。

まあ俗に言う和風美人って感じですね。

学校でも街でも色々な意味で有名な優等生で、いつも周りの人たちの噂になっている。

…けど、とても変わってる。

なにが？と言われれば…一言では言い表せない程にとか言いようがない。

そんな彼女がなんで僕と知り合いなのかという……

「あれだ、将来を誓い合った仲とでも言っておこう」

「勝手なことを言わないでください」

全否定します。

「なんだと！ あの時言った事は嘘なのか！？」

勝手に逆切れしないでください。

「そんな事言った覚えはなです。勝手に捏造しないでください」

「ちっ、別によいではないか…」

そう言つてベットから降りて。

「私の朝ご飯はあるか？」

と聞いてきた。

つてか図々しいですよ。

「自分でやればありますよ」

「ついでくれたつて別によいではないか…」

「僕は今から着替えて学校へ行く準備しないと……」

つて途中から殺気が…

「ほう、着替える…か、なら既成事実を作るチャンス？」

顔を赤らめて言っている龍之さん。

それより、なにヤバい事を言つて……

「そりゃー!」

「うわっ!？」

勢いをつけて僕をベットに押し倒した。

「さあ、これ…」

いや、ちょ！　まてえい！！  
そう思った瞬間…

ピリリリリリ！！！！

と僕の携帯がなった。  
ナイスタイミング！！  
誰か知らないが、ありがとう！！

「ほら！　携帯なってるから！　それ取るから！」

そう言っただけで押しのけて携帯を取った。

そしたら不気味な声が…

「おい…家の娘に手を出そうとは…言い度胸しとるな、小僧」

どこから聞いても、この声は堅気の人が出せる声じゃない。  
それに僕は手を出してません！　あちらからです！

「いいか、もし。…もしだが、手を出すんならそれなりの覚悟うち  
ゆうもんが…」

って所でいきなり声が入れ替わった。

「あんた！！　なにしとる！？」

「い、いや…ちょっと男同士の会話を…」

「ふざけてないでかしな!!」

「あ! ちょっとまだ…」

「五月蠅い!!」

【グシャッ!!】

…なんか今、撲殺したような音が…

その音と共に声は消えた。

そして変わって、女の人が。

「ごめんね家の夫が…そっちは気にしないでね」

そう言っで切れた。

「……………」

あっちは何があつたんだ？

微妙に気になるところだが、あえて触れない方がいいかもしれない。

「…優貴よ」

そう思っていた時、いきなり声を掛けられた。  
かなりビックリした。

「ど、どうしたの？」

「…遅刻するぞ」

そう言って時計を指した。

現在、8時30分。

完璧に遅刻。

「うそおおおー!」

そう言ってもどうにもならない。

「気にするな」

「気にするよ!」

…どうして僕の日常がこんなになってしまったのだろうか？

それは、約一週間ほど前のことである………が。

「これは次回へ続く!」

「えっ？ なにこれ…つづくの!？」

【次回へ続く!】



## 第貳話：事の始まりは…

この物語の始まりは一週間前に遡る…

\*\*\*

その日は日曜日でもとても良い天気だったそう…

「いや、こんな日は洗濯日和だな」

などと朝っぱらから主夫全開で言っているのは、一応主人公の月見優貴である。

「こんな良い日はきっと好いことがあるだろうな」

なぐんて思いながら朝ご飯を作っていたら…

ドカアアアアアアアン！！！！

朝っぱらから、何かが景気よく突っ込んで来たような激しい音がした。

「……………朝っぱらから何事？」

音はかなり近くで聞こえたような気がしたけど…  
そう思っただけで出てみたら

なんと自分の家の塀に黒塗りの車が沢山突っ込んでいましたとさ

「……いやいやいやいや、あり得ないって…これはきっと夢でしょ」

いくら疲れてるからってこれはないだろ？

……最近、張り切りすぎたかな。

そう思ってしばらく目を閉じて、また開けたけど…

「……………」

さっきと状況は変わらなかったとき。

「嘘だろおおおおお！！！！」

まだローンが15年程残ってるのに…

いきなりピンチになったよ、家計が！

急いで玄関まで直行！

…の前に

「……優にい…おはよう」

今さっきの音で目が覚めたのか皐月が起きてきた。

…つか、今までずっと寝てたの？

そんな僕の考えをよそに

「どうかしたの…優にい？」

首を傾げる姿は愛らしいが今はそんなときじゃない。

「おはよう皐月、朝ご飯はちょっと待っててね」

それだけ言って僕は下まで降りて玄関へ直行。  
文句の一つや二つは言ってやらねば！

そう思いながらドアを開けると…

『……………』

ごつい顔をしたおじさんやお兄さんの方々がいましたとさ

「……………」

無言でドアを閉めてチェーンロック！

「…今のはなに？」

マジで恐かったですよ。

それより僕、なんか悪いことしましたか？

「…どうしたの優にい？」

皐月が僕の方に来ながら言った。

「来るな皐月！今は来ちゃダメ！」

そう言い返すが効果なし。

既に僕の目の前に来ちゃいました。

「…優にい…何か変な汗出てるよ」

そう指摘されても仕方がない、だってあれはいきなりでインパクト強すぎですから。

「臯月、居間の方でチヨッット待つててね」

そう言つて奥に押しやる。

「？」

首をかしげながらも、素直に聞いてくれてたすかった。  
さて…

⌈  
⋮  
⌋

今のはビックリしたけど…もう居ないよね？  
そう思い（願い）ながらちょっとドアを開けてみると…

.....

団体さんがこつちを凝視していました。  
しかもドアを開けた瞬間に！

「ひいひいひいひいひいひいひいひい！？」

マジっわッ！！

しかもさつきより増えてるし! ?  
なにこれ! ? なんなの! ?

どうにもならないくらいの恐怖ですよ！

「……ここは一端逃げるか？」

なにも悪いことはしていないが、ここに居るよりはマシだ。そう思って奥に行こうとしたら……

[illegible]

… ドアを叩く音がしました。

「ひっ！？」

いきなりでビックリ  
つい悲鳴が出てしまった。

$\vdash \neg \neg A$

だがそんなのはお構いなしにドアは叩かれる。

…速く逃げなければ殺される？

脳裏に東京湾に自分と皋月が沈められる映像が流れちゃいました。

…最悪だ…

一刻も早く逃げなくては！！

だが時既に遅し。

ドカアアアアアアアアアアアアン!!!

となにかの一撃とともにドアが吹っ飛びました。

……が

「え、ええっ!？」

それよりも驚いたのはもつと他のことだった。

何故かって？

だって、そこにいたのは怖い人たちの中に唯一女の人が居たからだ。  
それにその人は見覚えのある人だった。

「……なんで龍之さんが？」

そう、そこにいたのは、僕と同じクラスの龍之由美さんだった。

## 第参話：どうにもならない流れ

りゅうのゆみ  
龍之由美

凛々しい顔立ちに鋭い目つきにファッションモデルのような肢体。黒く長い髪は邪魔にならないようにと紅い紐で一纏めになっているのが特徴。

学校では和風美人として有名。

スポーツ万能。文武両道。生粋の箱入りお嬢様。

男女問わず絶大な人気を誇る。

性格は家庭的で世話好き。

そして学園：いや、日本最強の剣術。

まさに無敵の超人である！

……と僕は聞いた事がある。

実を言うと、自分のクラスの人だが、僕はあんまり興味がなかったのによく覚えていない。

と言うか、クラスの人の名前もまだ覚えていないのにこれを覚えているのは奇跡に近い。

もの覚えは悪い方ではないが、なんというか：青春より家計が優先？って感じだから。

「……で？」

そんな人が何故ここに？

しかもとっっても恐い人達をつれて

「……」

黙って立っている龍之さん。  
周りにいる恐い黒服の人達。

……強盗ですか？

一瞬そんな言葉が頭を過ぎった。

「……優にどうしたの？」

居間の方から声がした。

そう言えば皐月が居るのをすっかり忘れていたよ  
かなりでかい音だったのでこっちに来ようとしている  
……まあ普通あんな音がしたらこっちが気になるよね

「来ちゃダメだ！」

「…なにが？」

一応、反応はしたがもうこっちに来てしまつて……

「……」

一時停止した。

と言うかショートしているような感じた

「……これどうしたの？」

目を白黒させながら皐月はそれだけ言った。

…そうだよ、いきなりこれ見たらそう言った反応するよね  
だけど僕も知らないけどね



「……それは私から説明しよう」

その時やつと龍之由実は口を開いた。

「だがここでは説明できない。よって、月見優貴。君にはちょっと私の家に来て欲しい」

それだけを言うと

周りの黒服の方々に腕をがっちり捕まれて強制連行態勢へ。  
そして皐月はと言うと……

「……優にいをよろしくお願いします……おやすみ……」

特に心配した様子はなく、龍之さんにそれだけ言っただけで家の奥に入ってしまった。

……あれ？　そんだけ？

ってかまだ寝ぼけてる！？

「うむ。わかった」

そんな寝惚けている皐月に律儀に返事を返す龍之さん。

そして僕は車の中へ連行されていた

……その前に僕に拒否権はないの？

くしばらくして～

見事にでかい和風建築（京都とかにありそうな感じ）  
の家につれてこられた。

…ここって確か、龍崎組って所じゃないかな？

龍崎組

それはこちら辺を仕切っているちよつとあれな感じの強面集団。  
時々警察や他の組から殴り込みやその他事件があつたりする所。  
まあ、つまりヤクザさんってやつですよ。

「……………」

なんだかメツチャ嫌々な予感がするのは僕の気のせいですか？

「さあ、こちらへ…」

そう言われて中につれて行かれる僕。

玄関前まえまで連行されていき、そのあと龍之さんが皆に

「御苦労だったな、後は私に任せろ」

『ウいつス！！！』

と言つてのでやつとのこさ黒服の強面男達に解放された僕。  
…なのだが、帰り際に龍之さんには聞こえないような声で…

『言つとくけどなあ…お嬢に手えーだしたらただじゃすまさへんか  
らな…』

『オンドりゃわかつとんのかボケえ…』

『お前はどこの海が好みなんや…場所ぐらいいは選ばせたる』

『ときどき癖でなあ…はじき（拳銃）が暴発するんや…』

『事故はどこにでもあるさかいなあ…氣いつけや』

などなど…物騒なことこの上ない言葉をもらった。ありがたくない…  
ってか、僕はここから無事に帰れるのか？

そんなことを思いつつ、さらに歩いていくこと数分間。  
しばらく歩いて行くとある部屋まで連れて行かれた。  
その襖に向かって…

「父上！ 母上！」

そう龍之さん言った。  
確かに言った。

父上と母上って確かに言った。

………って！！いきなりご両親ですかい！？

「おう入れや」

中からとても野太い声がした。

…どう聞いても堅気の人が出せる声じゃない。  
そして龍之さん襖を開けると…

「………ふん」

「……」

そこには今までの黒服の男たちには比にならない程のがたいで、通常の3倍割増しで目つきが悪く、顔に十字の傷が入った男性と、凛々しい顔立で着物を着たかなりの美人な女性がいた。

「ただいま帰りました」

そしてその後続いた言葉がとっても重要、かつこれらの原因であった。

「私の彼氏を連れて来ました」

「……へ？」

僕はあたりを見回す。

けど、僕以外は目の前のご両親しかいない。  
ではどこにいるんだ？

そう思っていたら龍之さんはもう一度いった。

「この人が私の彼氏です」

彼女は僕を見ながらハッキリとそう言った。

#### 第四話：予想を超えた条件

事情と言つのは誰にでもある理由のひとつである。  
ただどそれが解らないのであれば意味がない。  
特に今がその事態だった…

「…彼氏？」

一体何を言っているのだ？

「…ほう…此奴がか？」

その男性は僕を見てそう言った。  
い、いや…あの…そんなに睨まないでほしいです。  
なんというか、ものすごく怖いんですけど。

「……」

もう一人の女性は黙ったままで静かにこちらを見ている。

「はい。そうです」

龍之さんはハッキリと答えた。

その言葉には迷いなどがなかった。

まあ、別にそれはいいんだけど（いや、本当はよくないけど）…

「…何故に？」

一体全体どうしてそうになっているのだ？  
それを聞こうとしたが…

「ゆっ…ゆるさああああああん！！！」

メツチャクチャでかい罵声に僕の声はうち消された。

「僕は認めん！！ぜつつつつつたいにだああああ！！！！！」

さらにでかくなっていく声。

ある意味近所迷惑ってか、僕は迷惑だ。  
そして急に止まった。

「…そうか…」

なんだかよく解らないが大人しくなったみたい。  
…と思ったら。

「この男を消せばいとも簡単に問題解決ではないか…」

メチャ物騒な事を言いだした。

あ。なんだかやばい雰囲気だ  
だつてこの人、目が血走っている。

…もしかしてこのパターンはデストロイ？

僕が小動物に対してあっちは肉食恐竜…

「つー訳で、しねええええええええええ！！！！！」

どこから取り出したのか、いつの間にか日本刀（菊一文字）が握られて

僕の方に振りかぶ……ってえ!?

「わあ!?!」

間一髪避けた。

僕がいた畳には無惨にも真つ二つになっていた。

「……何故避ける?」

目を血走ったまま意味不明な事を言ってきた。

「死にたくないからです!!」

ちよつと泣きたくなってきた。

「じゃかしい!! ならさっさと消えろおおおお!!!!」

そう言つてまた振りかぶった。

「あなた、いい加減にしなさい」

となりに座っている女性がそう言うが…

「死ねござおおおお!!?!」

全然聞いていないようだ。

もう自分の世界に入りきっている。

そんな男性を余所に、となりに座って居た女性は軽い溜息をついて…

「うりゃ!!!!」

その掛け声と共に首筋に手刀が打ち込まれた。  
いや、正確には殴り付けたって感じた。

「ガハアツ!？」

それと同時にその男性は倒れてしまった。

「…これでよし」

満足そうに頷いた。

つてか、いいのかこれで!？

まあ命は助かったから僕は良いけど…  
などと思っていたら。

「あ。これは気にしないでいい」

落ち着いた様子で座っている龍之さんに言われた。

「これはよくある事だから」

…よくある事？

つつこみ所が沢山あるがもう野暮用ってことで。

まあ、実際助かったんだし。

「…それより僕はどうしてここに連れて来られたの？」

そう、本題はここだ。

僕はどうしてここに連れてこられたか？

それが今知りたい。



それに僕が彼氏ってどういうこと？  
そのことを龍之さんに聞いたら…

「そつ、それはだな…」

顔を顔を赤くしながらなかなか言わない龍之さん。  
急にどうしたの？

そんな僕達を見てその女性がくすくすと笑いながら

「まあ貴方もちよつと落ち着きなさい」

そう宥められた。

「そう言えば、まだ自己紹介してなかったね」

そう言つてその女性は頭を下げながら…

「私の名は龍之<sup>りゅうの</sup> 牧江<sup>まきえ</sup>と言います。これからよろしく」

そう言つて……えっ？

…今なんだか龍之つて聞こえたような…

「あ、あの…お姉さんですか？」

「うふふふ、そう見える？」

上品な笑いをしながら、何故か嬉しそうに笑っている。

複雑そうな顔をしている僕に、龍之さんが重要な事を言った。

「…私の母親です」

そう言った。

確かに母親といった。

間違いなく、母親といった…

「わ、わかすぎる…！」

思わず声に出してしまったがそんなのはどうだっていい！  
だって、どう見たって二十歳前後にしか見えない…  
そんな僕の反応を見ながら…

「お世辞が巧いね、君は」

などと言って嬉しそうにしている。

や、別にお世辞じゃなくてそのままの感想なんですけどね。

「で、こっちで寝ているこれ（夫）は龍之<sup>りゅうの</sup> 龍馬<sup>りゅうま</sup>と言います」

先程首筋を打たれたまま倒れている人物を指していった。

「……………」

勿論、倒れているので返事はない。

なんか扱いが適当に見えるのは気のせいかな？

「うつ…」

意識を取り戻したのか声を上げてきて…

「とりゃあ!!」

龍之さんが思いっきり殴った。  
殴った!?

「グハッ!!」

そしてまた意識は闇の中へ…って

「何してるの!?!」

実の父親に!!

「ん? トドメを刺しただけだ」

当然そうに言った。

「……………」

やはり、扱いは酷いものであったか…

哀れに思いながらも、これはもう無かった事にした。

だってまた殺されかけたらたまったもんじゃないから。

「じゃあ、今度は君の自己紹介ね」

その様子を見ていた筈なのに、何も突っ込ま無かった龍之母が言った。

この人もこの人で問題があるような気がする…

「えっと…僕は龍之さんと同じクラスの、月見優貴と言います」

軽く礼をしながら言った。

「おお、礼儀正しい」

嬉しそうに言う龍之母。

なんだかやけにテンションが高いのは気のせいかな？

「成る程…月見優貴って言うのか……月見…どうりで…だな…」

小さな声でぶつぶつと何か言いながら。

「…でだ。どうせ由実の事だから、何も教えずにここに連れて来られたんでしょ？」

そう言って龍之さんを見て言った。

「……………」

黙ったままで龍之さん何も答えなかった。

なんだか見透かされたような感じた。

さすが母親…伊達に娘を育てているわけではない。

「あの子…由美はね、実はお見合いするはずだったの」

…はい？何ですと？

お見合いですと？

お見合いっていえばあれだ。

よく結婚をするためにやるイベント？みたいな感じのやつ。

「はぁ… 大変ですね」

本当に何考えてるんだかね、大人って奴は…  
そう思っ  
て龍之さんを見たら…

「……母上……」

メツチャ不機嫌そんな顔を龍之母に向けていた。  
まるで『余計なことを言うな』とでも言っているような感じで睨んでいた。

「あら？ 言いたいことがあればいいのに？」

にやにやしながらそう言われて黙ってしまった。  
どうやら母親には勝てないらしい。

「まあ、そこは色々と…な」

そう言っ  
て親子での会話は終わり

「さて、月見さん…でしたよね？」

「はぁ…そうですけど…」

「先程はご迷惑をおかけしました」  
深々と頭を下げた。

「い、いえ！ 別にそんな…」

じろもろする僕を見て。

「あははは、本当に月見君は面白いな、気に入った!!」  
笑われてしまった。

何か手のひらで踊らされている感じだ…恥かしい。

「…母上、もうその辺で」

そう言っ僕を庇ってくれた龍之さん。

「あ、ありがとう。龍之さん…」

ちよつと照れながら言ったら

「えっ!? い、いや別にたいしたことじゃない…」

顔を赤くして目を反らされた。  
…僕って嫌われてるのかな?

「……くっ、くくくく…」

それを見ていた龍之母は、またくすくす笑っていた。

『……………』

いや、なんというか…恥ずかしい限りである。

「まあまあ、月見君はここに来た理由を知りたかったんだよね?」

そうです。全くそのとおりです。

「教える代わりに条件があるのだけど…いい？」

いきなり真面目になった龍之母。

「はぁ？ 別にいいですけど…」

適当に答えた

どうせ大した条件じゃ無いと思ったからだ。

「…本当に？ 破ったりしたら殺しにくるよ？」

嫌なたとえですね…

そして笑えない…なんか本当に実行しそうだから。  
けど僕は了解してしまった。

「大丈夫です」

ハッキリとそう言ってしまった。

「そう…」

意味深に頷き

「…では月見優貴よ、私の娘、龍之由美と結婚しなさい」

「……………は？」

僕の想像をはるかに超えた条件だった。





第五話：これは夢？それとも…

人生色々あるがいきなりこんな事を言われたのは初めてだ。  
まあ普通はこういつた経験はしないであろう。  
つてか、夢であつてほしい。

「…結婚？」

誰が誰と結婚するのか？

「それは月見君と由美ですよ」

ほんわりと言う龍之母。

「…へえ…」

やはり現実味のないことだらけだ。

……今日は現実的に有り得ない事が多いが、今度はまた一段と激しいな。

やはり最近張り切りすぎたんだな。

そしてこれは夢だ。きつとありもしないことを僕の脳が勝手に妄想しているだけで…

なぐんてちよつと現実逃避を試みたが…

「ほな、よろしいですね」

やっぱ変わらなかったりする。

現実って厳しいですね！本当に！

「いやいや…ちょっと待って下さい。何でそうなるんですか？」

おかしいでしょ？ 現実的に考えてなぜに結婚話に？

まあ有り得ない話ではないが、今の状況からこの展開はおかしいと僕は思う……

そんな考えだけど龍之母はいたって真面目

「……なにかおかしい所がありましたか？」

何処も彼処もおかしいです。

「その条件はどうかと思います」

いたって普通の意見？を僕は言った。

そう。僕は普通の意見を言ったただけなのに…

「……では約束を破る…と？」

目つきが細くなっていくにつれ殺気が鋭く強くなる。

それはもう気が弱い人だったら失神しちゃうんじゃない？ってなくらいの殺気だ。

「…母上。ちょっとそれは強引では？」

今まで静かにしていた龍之由実さんが助け舟を出してくれた。けど、できればもう少し早くしてほしかった。

「……そうですね」

一応、娘の言葉を聞き入れた。  
おかげで殺気が弱くなり、少しは雰囲気に戻った。  
だが、それでも事態のピンチには変わらない。

「では、由実に聞きましょう」

僕から標的を代えた。

「由実……正直に答えなさい」

「……はい」

少し緊張が走る。

龍之さんの顔にも緊張が出ている。

「……あなたは月見君の事をどう思っているのですか？」

「えっ！？　そ、その……どう……と……かと」

僕の方をちらちらと見ながら言うが途切れ途切れになってよく聞けない。

「はつきりと言いなさい」

「あ、その……いえ……あれです……嫌いではない」

顔を真っ赤にしながらも一応答えた。  
けどその反応を見た龍之母は……

「……では好きでもないわけですね？」

その言葉を聞いた瞬間

「そ、そんなわけではない!!」

そう叫んだ。

「あっ!？」

そしてただでさえ赤かった顔はさらに赤くなり…

「う、ううつっ…」

なんだか泣きそうな顔になってしまった。

その反応を見た僕は可愛いな…などと場違いなことを思っていたりした。

そんな反応をまるで予想していたかのように、龍之母はニッコリと笑い

「ほらね。そう言うことだから」

にこやかに僕に言った。

「…………えっ？」

…………なにがそう言うことなんですか？

僕にはさっぱりですけど？

そんな僕の反応に気付いたのか龍之母が…

「…………もしかして気付いてないわけ？」

ちよつと驚いたように聞いた。

「何がですか？」

なんだかよく状況が解らないんですけど…

僕が複雑そうな顔をどう取ったのか知らないが、龍之母は龍之さんに

「…由美。あんた苦勞するわよ」

ちよつと同情した目で見られた龍之さん。

「……………」

さつきとは打って解って不機嫌になった龍之さん。

…ってなんでそんな目で僕を見るんですか？

そんな疑問に龍之母は一言。

「それは月見君が悪いから」

だそうだ。

一体全体何処が悪いのかな？

などにとんちんかな考えをしていた。

「…こほん。ちよつと話がずれたけど本題にもどります」

まあ、今まで話がそれていたのだからちよつとは真面目にしないと  
な。

「……………二人の意見から、結果的には結婚は早いと言うことでまずは

恋人からって条件でいい？」

「うーん…僕は別にかまいませんよ」

それだつたら何となくよい気がする。

「……………いいです」

一方、こちらは不満なのかちょっと不機嫌そうに答えた。

「じゃあ、今日はお開きって事で…」

そう言つて龍之母は龍之父の襟を持ち引きずつて出ていった。

「あ。そうそう…」

また歸つてきた。

「今日は遅いから泊まっていきなさい」

それだけを言つて出ていってしまった

……………つて！ え！？

「ちょ！ ちょっと待つてくださいー！！」

僕が帰らないと皐月が心配するし、何よりここに連れて来られた理由を聞いてない！！

それを言つつもりで廊下に出るが…

「…いない？」

さつきまで居たはずなのに、もとからいなかったかのように消えてしまった。

…そして僕はどうなる？

そんな疑問に答えてくれたのは龍之さんだった。

「…心配するな、一応連絡はしておいた」

そう言って携帯を閉じた。

さすがと言っか仕事が速いなー

「それに今日は色々あっただろ？ 明日も休みだし今日は泊まっていけ」

とかなんか言ってるって事は、僕は既に泊まる前提なんですか？

「……ここに泊まるのは嫌か？」

少し不満そうに言ってきた。

「いや、そんなことはないよ」

因みにこれは本音。僕はこう言っただ家（平屋）は好きだから泊まれると言えはうれしい。

けどさっきの人たちに闇討ちされそうで怖い。

「ならよかったよ」

そう言っただ笑った。

今の笑顔は最高に可愛かった。

その笑顔に僕はつい見とれてしまって…

「…可愛い」

思わず声に出てしまった。

「え!？」

「あ!？」

その瞬間、龍之さんは顔を赤くしてしまった。  
言った僕もしまったと思った。

「……」

「……」

お互いに沈黙する。

そして何故か顔を赤くして龍之さんは周りを見て…  
不意に龍之さんが近づいてきた。

「!？ ど、どうしたの!？」

かなりドキドキする。

「…動くな」

そして左の頬に手のひらが来て



「!？」

頬にキスをされた。

それは一瞬であつたが頬に触れた柔らかな感触。まるで長い時間が過ぎたかのように思われた。

「……え……つと……」

真つ赤になつたまま何かを言おうとする龍之さん。

「こ、これはだな……その……今日、色々迷惑を掛けてしまったお礼……だ」

それだけを言い切つて

「で、では……また明日」

出ていってしまった。

「……」

……今のは現実なのだろうか？

その頬に残された感触に戸惑うばかりで、そのあとの事は殆ど覚えていなかった。

## 第六話：なんだかんだで似たもの同士

色々あつて現在月曜の朝。

まあ実際、昨日は本当にやばかった。

龍之さんの家に泊まったのは良いが、あのあと龍之父に闇討ちされるわ、その他の部下っぽい人たちにガンをつけられるわで生きた心地がしなかった。

まあ他にもまだあるが、もう思い出したくない。

そんなこんなでさっき言つたとおり、今日は月曜日。

今日は皐月は部活な為、朝早く出ていって、ついでに僕も気分転換かねて朝早く学校に来たのは良いが……

「……うゝん…相変わらずやばいな……」

机に向かって一生懸命に電卓で計算する。

このノートの表紙に書かれているは家計簿。

朝から気分転換した意味がない。

「……今月はいいとして、来月が結構きついな」

毎度の事ながら家計は大変である。

赤字にはギリギリならないが、これと言った黒字にもならない。

まあ今はこれで良いのだが、後々のことを考えると少しでも貯金はしておきたい。

それが僕の考えだったが……

「…現実 is 厳しいなあ」

そのまま頭を机に突つ伏す。  
まあ、現実なんてそんなものである。

「…源信さんに言つてバイト時間増やして貰おうかな」

なぐんて考えている最中

「なんだ…また赤字か？」

前の方から聞き慣れた声がした。  
顔をあげてみるとそこには見慣れた人物がいた。

「…やあ、賢治おはよう」

彼の名は宮田 みやた 賢治 けんじ

僕の親友で中学生からの仲だけど、僕は賢治とは同じ中学じゃない。  
バイト先の酒屋の宮田 けんしん 源信さんの息子だったから知り合ったのだ。

「お前も大変だな……親父や母さんが言つてたぞ『家に来ないか？』  
つて」

言いなが前の席に座る。

そう、酒屋の源信さんや賢治の母親は僕の身なりを知つてか、いつも気を使つて貰っている。

そのおかげで給料も少し多めにして貰つたり、色々な物をおそろわけして貰つたりと本当にありがたいことばかり、それに賢治も何だかんだ言つていつも心配している。

「嬉しいけどいいよ。迷惑になるだけだし、今のままで暮らせない  
ことはないし」

机に突っ伏したまま言う僕

「別に迷惑だなんて思っていないんだがな」

溜息混じりに言う賢治。

「ま、お前さんがそう言うなら別にいいぜ」

そう言っただけ席を立った。

「ん？ どこいくの？」

その質問に対して

「……また呼び出したよ」

苦笑混じりに言う。

「成る程……相変わらずもてるね」

そう賢治はよくもてる。容姿も良いし、性格も素っ気ない感じだが  
気配りがよく優しい

それに運動神経も抜群で成績も上位にランクしている。

バイト先に彼が居たからよいものだけど、それでなかったらきつと  
接点なんてなかっただろうなあ……

因みに僕は成績は真ん中を行ったり来たりの微妙な感じだ。

運動神経も人並みの一般人。人生って不公平だな……

「そう言うわけだから、またあとでな」

そう言い残して教室を出ていった。

賢治が出ていったあともう一度家計簿を見直す。

「……………」

何度見ても数字は変わらないのだから虚しい物だ。

まあ、そんなこんなでHRの時間になったのだが…

そんな時に事件が起きた。

主に僕を巻き込んだ事件が…

「えゝ今日はこれと言った連絡はありません…」

今前に立って話している人は我らの担任、有馬ありま 浩介こうすけ担当は歴史  
若手の先生で生徒からの人気が高い。そして思いこめば何処までも  
自分の道を突き進む人物でもある。

「そんな訳だからあとはよろしく月見!!」

「……………は？」

いきなり僕の名前を呼ばれた。

何がよろしくですか？

そんな疑問を余所に

「あと……………龍之もな」

それだけを言って出て行った。

僕がまだ疑問に謎めいているとき。

「…お前聞いてなかったのか？」

あきれたように賢治が聞いた。

「お前、今日は日直だろ？」

「…そうだけど？」

それがどうしたんだ？

「だから、今日の五時間目に歴史で使う教材を社会科準備室から持って来いってことだよ」

なるほど

……あれ？

「さっき龍之さんもって言ったけど？」

「一人で運べないから、龍之さんも一緒に連れて行けって事だろ」

流石がとつか何というか理解力があるな本当に。

「そんな訳だから頑張れ」

そんな訳って言われてもね

ちらつと龍之さんを見るがこれと言った変化はない。

本を読んでいるのか、周りに関係せず静か目を通している。

……そう言えば家に連れて行かれたあの時は凄く可愛かったのだけ

どな…

昨日の出来事を思い出していたら、あの時キスされた事まで思い出してしまった。

「……お前大丈夫か？顔が赤いぞ？」

賢治にそう言われ、無意識に自分が顔を赤くしていた事に気付いた。

「え！？ そつ、そうかな？」

「…何故焦っているんだ？」

「き、気のせいだよ！」

そうは言うが僕はまだ赤いままだった。

そして僕はそれを誤魔化すのに必至だったために気がつかなかった。いつの間にか僕の方を龍之さんが赤くなりながら見ていた事に……

## 第七話：予期せぬ事態

場所は社会科準備室。

そこは薄暗いが日当たりはそこそこ良くて結構居心地がよい場所でもある。

そんな場所で月見優貴は焦っていた。

目の前には目を閉じた少女がいた。

勿論その子は僕が知らない子。

顔立ちは整っており、一目で見てもかなりの美人と言っても良いくらい容姿だ。

だが反応がいまいち無い。

まあ別にそれには問題ない、その今の状態に問題があるのだ。

その状態とは……まあ、何というか仰向けになった少女に覆い被さっている状態、とどのつまり押し倒している状況。

「な、なんでこんな事に？」

本当に何でこんな事になったのかと言うと、それは今から少し前のことでした。

社会科準備室は一号棟の二階にある。

あまり使われていないせいか埃が溜まっており、ちよつとかび臭いところでもあった。

そんな中、ちよつと隣を見てみれば……

「……なんだ？」

龍之由美さんが本を整理していた。

その距離はなんと10cm……かなり近いです。



「…別に文句はあるまい」

そう言っただけでまた作業に戻ってしまった。

うーん…確かに文句はないけどさ…

あの時のことを思い出しちゃうんだよねえ  
そう思いながら見ていたら

「……すまないが、あまりこっちを見ないでくれないか？」

顔を赤くしながらそう言ってきた。

「ご、ごめん！」

「い、いや…別に見ていて悪い訳じゃない」

さっきより顔を赤くしながら言う龍之さん。

それにしても、やたら顔が赤いな…

もしかしたら風邪なのかもしれないな。

「…ちよつと龍之さん」

「なんだ？」

「こっち向いて」

「ん？」

そしてこっちを向いた時に

「じめん」

龍之さん額と僕の額をくっつけて熱があるか確かめてみた。

「っ!？」

龍之さんは驚いたようだが、別に嫌がっているようじゃなかった。

「……………」

うゝん…ちょっと熱ほいようだな。

保健室にでも行かせようかな？

そして頭を放したら

「……………龍之さん？」

なんだかボーっとしているように見える。

やっぱり熱があるのか？

そう思って名前を呼んでみたが…

「……………」

見事に無視された。

「……………龍之さん!！」

今度は強めに言ってみた。

「……………」

華麗に無視された。

なんども無視されるとちよつと悲しいぞ…

それとも僕って嫌われてるのかな？

そうネガティブに思い始めたとき

「……………由美…」

「…はい？」

「……………ほかの奴らがいないときに私を呼ぶときは由美と呼べ」

顔が赤いままそのように言った。

…いやいや、女性を名前で呼べって僕はどうかと思うのだけど  
だか、それを期待したように僕を見ている龍之さんがいる。

…これって呼ばないとやっぱいけないんだろっなあ  
と言うわけで。

「…ゆ、由美さん」

「……………はい」

…ヤバイ。なんか変な気分になってきた。

なぜがドキドキしながらも本来の目的を忘れないように

「ね、熱があるみたいだけど…大丈夫？」

「……………ああ…」

なんだかさつきよりボーっとした感じになっている。

本当に大丈夫かな？と心配し始めたとき

「……すまない、ちょっと保健室に行っていていいか？」

そう言つて、僕の反応を聞かずに出て行ってしまった。

「…本当に大丈夫かな？」

今さっきまで反応を見るとかなり心配だったが、それから10分もたたない内に…

ガラガラ！！

勢いよく扉が開く音がした。

「ん？」

もしかしてもう帰つて来たのかな？と思つて見てみれば

「こ、ここまでは追つてこないよね」

龍之さんではなく、違う女性がいた…

この人もかなりの美人さんだ。

「…あつ！？」

その女性と見事に目があつた。

何だが焦っているようにも見える。

「う、嘘！？ ここには人が居ないと思つたのに！？」

ビックリしたと思ったら困っているようだ。

「き、きみ！ 少しここでかくまって!？」

それだけ言って入り口から見えないように机の下に潜った。  
それと同時にまたドアが開いた。

「おい！ ここに人が来なかったか!？」

怒鳴るように複数の男子生徒が入って来た。

「い、いえ、入ってきてませんけど……」

あまりの迫力にちよつとビックリ

「うそじゃないだろうなあ!！」

脅すように僕を見てきた。

……かなり恐い。

けど、なぜか心の中で……妙な感じが……昔、これと同じ体験をしたよ  
うな……これってデジャブ？

そう思いながらも、ちゃんと答える。

「ほ、ほんとうですよ」

「……ふん。ならいい」

鼻で馬鹿にされたような感じた。

「まあ、沖田歩美様がお前のようなへなちよこの相手をなさると思

っていないしな」

「……………」

馬鹿にされたような感じではなく、確実に馬鹿にしている。  
正直、かなりむかついたが…

「そ、そうですね…」

こう言った時は大人しく引き下がるのが大人ってやつだ。

「おい、もしここに沖田歩美様が来たら直ちに連絡しろ」

正直どうでもいいが、早く何処かへ行つて欲しいので

「解りました」

と、素直に頷いて置いた。  
それを見て納得したのか

「では、引き続き搜索だ！！！！！」

そう言つて全員連れて出ていった。

「…はあ、疲れた」

一気に疲労だけが押し寄せる。  
最近こんな事ばかりだ。

「…………ごめんね、本当に」

あいつらが出て行ったのを見て、もう安全だと思ったのか出てきた。

「本当に困ったもんだわ、私は迷惑なのに」

なんだか独り言を言いながら愚痴を漏らしている。  
そこでふと疑問が浮かんだ。

「…あのさ、どうして追われてるの？」

僕の疑問に彼女は驚いたような感じた。

「私のこと知らない？ ほら沖田歩美って言う人を」

一応脳味噌の中のデータを検索したが該当する名前は無し。

「…ごめん。知らないや」

その反応に彼女は少し落ち込んだようだ。

「うつ…そんな……これでも少しは売れてると思ってたんだけどな  
あ」

なんだか悪いとをしたような感じた。

その僕の反応を彼女は見て少し笑った。

「ま、いつか。助けて貰ったしね」

そう明るく言って

「じゃあ、自己紹介ね。私の名前は沖田<sup>おきた</sup> 歩美<sup>あゆみ</sup>一応、アイドル歌手です！」

「…は？ 歌手？」

今なんだか歌手って聞こえたような…  
そんな反応を余所に勝手に話が進む。

「これでも売れてると思うんだけどね」ほら『今月の一押し』って番組で注目度ナンバーワンとかも言ってたんだよ！」

すみません。非常にすみません。  
僕が見る番組はお料理番組とか温泉巡りの番組くらいです。  
そんな反応に気付いたのか大人しくなっ

「…本当に知らないんだ」

ちょっと残念そうな顔をした。

「い、いや…その…ごめん」

「なんで謝るの？ 別に気にしてないよ」

ちよつと驚いたように言う。

「まあ、確かにざんねなんだっただけだね」

可愛く舌だして

「それに今私のことを知ったからもついいでしょ？」



顔を近づけてきて言う。

こう至近距離になるとなんだかドキドキする。

「じゃあ、今度は君の番」

えっ？僕の番って言われても…

「僕は月見優貴」

「………そんだけ？」

…それ以外になにを言えと？

「うーん…じゃあ、趣味とかは？」

「料理とか、家事全般…かな？」

「ふーん、じゃあ今度手料理食べさせてよ」

「うん、別にいいけど」

沖田さんと話しがのってきていたのだが…

「いたか…!!？」

「いや、何処にも居ない!!」

「やっぱさっきの部屋にいたのでは？」

「ああ、きつとそうに違いない!!」

そう言った会話が廊下の方から聞こえてきた。  
きつと先程の奴らの会話だろう。

「うわ、やばいかも!？」

そう言ってまた隠れようとしたが、その後ろの本棚に腕が当たって

「ふえ？」

本棚が倒れてきた。

「あぶない!!」

そう言ったのと同時に体を動かした。

彼女の腕を引っ張ってこちら側に引き寄せた。

…のは良かったのだが

「うわ!」

「きゃっ!？」

強く引きすぎたせいか、そのまま倒れてしまった。

そして運が悪く本棚がこっちの方にも倒れて来て…

「うそ!？」

そう思うが現実。

「くっ…」

倒れて来るはずの衝撃に備えて彼女の頭を抱えるようにして覆い被さったのだが…

「…あれ？」

本棚は一向に倒れて来る気配はない。

「なんで？」

そう思っただけで倒れてくる方向を見たら、本棚は前の机に引っかかって巧い具合に倒れて来なかった。

「はあ…」

なんだか頑張っただけで損したな。

「……ねえ」

下の方から声が聞こえた。

「ん？ ああああっ！！？」

目の前に彼女の顔があった。  
その距離なんと20cm弱

「ぐっ、ぐっぐっぐめん！！」

起きあがろうと頭を上げたら

「ごっくん!？」

「い、いたい…」

上の棚に当たった。

「だ、大丈夫？」

「大丈夫です…」

本当は痛いけどね。

そしてその時に授業が始まるチャイムが鳴った。

「ちっ…時間か」

「今は皆教室に帰るぞ!!!」

「今度はあっちの方をしらべるからな!!」

そんな会話と共に彼らは去っていった。

「…いったね」

ほのかに顔が赤くなっている沖田さん。

「……………」

そして僕を見たまま黙ってしまふ。  
そんななか僕はと言うと考えていた。

「どうしよう」

彼らがいなくなったのは良い、良いのだが

…僕等はどうなるんだ？

机と本棚に挟まれた状態で、彼女を押し倒したままの僕にどうしろと？

そんな考えと共に時間は過ぎていくのだった。

## 第八話：事の事態は慎重に

人はある程度の事には耐えられるようになっていく。

しかし、理性と煩惱との格闘の前ではそれらの意味がまるでない。それがまさに今がその時だった。

「…どうしよう」

本当にどうしてこう不幸な事ばかり起こるんだろうなあ  
きつと何かを取り憑いているんだ。  
よし、今度お払いしてもらおう！  
そう心に誓うが、事態が変わるわけでもないので現実に戻ることに…

「大丈夫？」

下になっている沖田さんから心配そうに言われた。

「大丈夫だよ」

表はね、内心はかなりやばいんだよね  
だって、沖田さんも龍之さんと同じくらい美人だしな。  
と心の中でそれだけ言っただけ…

「まあ、誰かが助けてくれるよ」

そう明るく言うが

「今は授業中なの？」

当たり前の事を言われた。

ってか、今が授業中の事をすっかり忘れていた。

「そ、そうだったね」

なんだか恥ずかしい。

それに……

「……ん……あつ……」

下の方から沖田さんの吐息や喘ぎ声が聞こえてくる。

なんだか泣きたくなってきたよ……

だってこれじゃあ拷問だよ？

僕は人付き合いは良い方じゃあない。

そのため女性ともあんまり喋らないし、ただでさえ、こういった美人の人には耐性がない。

そもそも、こういった出来事は初めてだぞ。

まあ、普通はこういった出来事はないんだろうけどね。

……きつと賢治ならどうにかなるんだろうなあ

と今教室で授業を受けている親友の事を考えていた……ら？

「……ん？」

賢治？

……ああっ！？

そ、そうだ！ 賢治に助けて貰えばいいんじゃない！

ならすぐに実行に移すべし！

「あつ、あのさ沖田さん」

「ん？ 歩美でいいよ」

「はい？」

いきなり話がそれた。

「えっと…何がですか？」

「私の名前を呼ぶときは歩美でいいよ」

「い、いや、だけどさ…」

「うん。人前じゃ、沖田でいいけど、今は…ね？」

いや、ね？ って言われてもさ…

…まあ、この際気にしないでおう。

そもそも龍之さんといい、沖田さんといい、最近の女子って名前で呼ぶことが流行っているのか？

って、今はそんな事を気にしている場合じゃない！

「え、えと…歩美さん？」

「なに？」

「僕の胸ポケットに入ってる携帯を取ってくれない？」

「いいけど…何で？」

「それは今から助けを呼ぶから…」



って途中まで話していたら。

「あつ、じゃあ取らないよ?」

何故か断られた。

「……えつと…なんで?」

…僕には断る理由が解らない。

それに早くしてくれないと、僕の理性やらなんやらが暴走しかねないんですけど…

そんな思いを知ってか知らぬか。

「だって、もう少しこのままでもいいじゃん」

楽しそうに答えられた。

いやいや、なに楽しそうに答えてるんですか?

僕はちつとも楽しくない!

今、理性を押さえるので精一杯なのにこれ以上このままだったらやばいことになりかねない!

「まあ、その時はその時で…あつ、そうなたらちゃんと責任は取ってね」

……あれ?

なんだかもの凄いことを言ってるじゃない?

僕の一生が決まりかねないことになってるよね?

「そんな訳で、よろしく」

いやいや、何がよろしくだよ!?

最近の女性はこんな人ばかりだな!

まさに強引な女性社会!

…別の意味で日本の将来が心配だ、あと僕の未来も心配だ。  
それにこれ以上は僕が持たない。

「……仕方がない。こうなったら」

あれをやる!

今僕の潜在能力を目覚めさせて一気に上の本棚を持ち上げる!  
さあ、今こそ本気を出すときだ!!

「うおおおお!!!!」

僕は頑張る!

頑張る!!

頑張るだのが…

「つ、疲れた…」

所詮、無駄な事だった。

まあ、普通の人と比べれば力はある方だが、運動系と比べれば、まだまだ力がない方なので持ち上がる訳がない。

「…やっぱり僕には潜在能力はないか」

当たり前である。

「……さっきから何してるの？」

ちよつと呆れたように聞かれた。

「い、いやね、上の本棚を持ち上げたらどうにかなるかな？って思  
つてさ」

「で、どうにもならなかったって訳ね」

「おっしやる通りです」

「きつと無駄なことはするなってことだよ」

全然意味が解りません。

そんな事よりも僕は疲れました。

「そう？　なら元気になるおまじないをしようか？」

意味深な事を言ってきた。

「へっ？　それはどんなおまじないですか？」

ちよつとは興味があるので聞いてみた。

「うふふふ……」

そう言いながら、両手で僕の頬を優しくさわる。

「ん？」

……このパターンって……どっかであつたような……  
そう思つた瞬間。頭を下の方へ引っ張られた。

「ふえええ！？」

そしてその下にあつた沖田さんの唇へ……って！？

「ちょー！？ ちょっと待ってー！！」

頭に力を入れて下に行くのを耐えた。  
危うく僕の唇と沖田さんの唇がくっつくところだった……

「……なに？ どうかした？」

いや、どうもなんでそんな事になるんですか？  
それが知りたいですよ？  
だが相手には通じない。

「ん？ 私のファーストキスだよ？」

見当違いの事を言う。  
僕はそんな事を聞いたんじゃないぞ。

「まあまあ、気にしない気にしない」

そう言つてまた頭を動かそうとする。  
これじゃあ、意味がないそれに僕の理性が持たない……  
そう思い始めた時

「………なにをしている優貴」

突然、僕の名前を呼ばれた。

いきなり呼ばれたため、僕の心臓がびくっと飛び上がったような感じになった。

沖田さんもいきなり他の人の声を聞いたためかなり驚いた様子だった。

「……一体何をしているのか優貴？」

その声の主は本棚の隙間から僕等を見ていた。

その人物とは先程出ていってしまった龍之由美さんだった。つり上がった瞳は赤く燃えてるように怒りを現している……まあつまり、かなり怒っていたのだった。

## 第九話：選択肢に問題アリ！

「……で？ お前は一体何をしていたんだ？」

怒鳴っているわけではない。

だけどその声には明らかに逆らってはいけないと本能が訴えている。その声を必死に受けている月見優貴です。

現在、龍之さんに説教されています。

あの態勢から助けられたのはよいが、何故か怒られています。

原因は色々あるが、あの時の状況が一番の原因であることは言うまでもない。

「聞いているのか？ 一体お前は何をしていたのだ？」

かなり怒っている龍之さん、その怒りは見ただけではつきりと解るオーラが出ている。

「私は別に怒ってないんだ。ただ私が居ない間にどうしてこうなっていたかを聞きたいんだ」

優しくにこやかに問いかけているつもりだろうが、目が笑っていない。

顔は笑っているのに、明らかに目が笑っていない。

それに声も笑っていない。

これは恐い、恐すぎる…

死神や閻魔様もしっぱをまいて逃げちゃうくらい恐い。

「え、えと…あれは事故だったんですよ」

あれというのは先程の事故のことである。

「それで？」

「そ、その、あれには一切やましい感情があつた訳ではなく」

「だから？」

「そう言つ訳だから……って、沖田さんからも説明してください！-」

なんだか苦しくなってきたため、バトンタッチ！

しかし、その結果によりさらに最悪な方向に行つてしまった。

「あれそうだったの？ 私は期待してたんだけどね」

なぐんて言つちやつたもんだから。

「！？！？」

無言で怒りのボルテージが上がつていく龍之さん。

やばい！ これはやばすぎる！？

「貴様……何をふざけた事を言っている」

もうすでに冷静さを失っており、顔が怒りで赤く染まっている。

「あら？ 別にどうだって良いじゃない。あなたには関係ないし」

今、明らかにあなたと言うところを強調した。

冷静にだが、あきらかに挑発している。

「ふざけるな！ お前こそ優貴には関係無かるうー！」

「ふん。あんただって月見君とは関係ないでしょう。それともなに？ やきもち？」

……なんだかもの凄いことになってきたぞ。

僕が一体何をしたんだ？

それになんで僕がそこで出てきたるのかね？

神様に一刻も早く終わることを願いながらしばらく待っていた。

くそれからしばらく続きく

「貴様は一体なんだ！！」

「あなたこそ一体なんなのー！！」

もう何十分たっただろうか…

二人とも終わるどころかヒートアップするばかりで、これ以上はオーバーヒートするんじゃない？ ってなぐらいやばい感じた。

さすがの僕もこれ以上はつき合い切れない。

ってな訳で、おとなしく退散だ。

気配を消してそのまま……

「どこに行くのだ？」

「どこに行くの？」



一瞬にしてこちらを振り向く二人。  
しかも、その目線があまりにも鋭すぎる。  
もう、鉄板だつて貫きそうなくらいだ…  
さすがにこれは命の危険を感じた。

「あ、いや、その、だつてねえ？」

もう、自分でも何が言いたいのがよく分からない。  
そんな僕を見ていた沖田さんが急にいいこと思いついたつて表情をした。

「ねえ、月見君ちょっと聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

にこやかな表情で言う沖田さん。  
だか、その表情とは裏腹に『絶対に答えさせるまで逃がさない』と  
言う意思がこめられている。

「貴様は何を言っているんだ？」

そんな顔をしながら言うが、目線でいいから少し黙つてと押さえつけられて…

「私と龍之さん…月見君はどっちが好きかな？」

凄い事を聞いてきた。

「な、なに！？」

驚いている龍之さん。

「は？」

ある意味、僕も驚いた。

これって究極の選択？

マジで答えるのか？

これはある意味、晩ご飯の献立を作るよりも難問だった……

## 第壱拾話：嵐のような出来事

月見優貴は悩んでいた。

そもそも、なんでこんな訳の分からない選択をしなくちゃならないのかが不思議だが、こうなってしまったので仕方がない。

……いや、本音を言えばこうなる前にどうにかしたかったけど、今さらどうにかなるわけがないのでここは割り切っておく。  
つてか、それ以上考えたら何だか泣きたくなる。

「で？ 私と龍之さん…どっちが好き？」

その質問の内容が僕にはよく分からない。  
そう聞こうとした…のだが。

「な！ なにを馬鹿なことを！？」

龍之さんの声に遮られてしまった。

「そ、そもそもだな！ そう言っただ事は……」

「あらず。龍之さんは月見君に好かれてる自信がないんだ？」

今の発言は明らかに地雷を踏んだ。

「……………ああ！？」

龍之さんがドスの利いた声で思いつきり沖田さんを睨んだ。  
だが、そんなのはお構いなしに喋り続ける。

「そつだよねー別に貴方と月見君はどうでも無いわけだし…じゃあ、別に聞かなくてもね」

「…まて」

いつもの冷静な声ではなく、明らかに敵と見なした声だ。

「どうかしました？」

こつちも先程とは違って、敵に対しての反応だ。

「ふざけるのも大概にしろ、貴様」

「あら、別にふざけてるつもりはありませんけど？」

「なら喧嘩を売っているのか？」

「別にいー貴方には関係の無い事でしょう？ これは私と月見君との問題ですから」

「……そうか、なら関係が大ありだな」

「それはどこら辺が？」

「ふん、私と彼は既に付き合っているからだ！」

問題発言を…って、そう言えばそうでしたね。

色々な事があったので、僕はすっかり忘れていたけど…

「へ、へえー」

なんかちょっと引きつった顔になった。

「だ、だからといって、月見君が貴方を好きとは限らないでしょ？」

「なら本人に聞いてみるがよい」

自信満々に言う龍之さん。

…って、結局はこうなるのか…！

なんだか話の流れ的に僕には来ないかな…って思っていたのに…

「そうね、そうしましょう」

しかも同意してるし！？

なんでこんな事を答えなくちゃいけないんだ！  
なんて今更叫んでも意味がない。

「月見君、本当は龍之さんとは付き合っていないんだよね？」

そう言いながら僕に近づいて来る。

それを避けようと僕が反対に動けば。

「愚問だな。私と優貴は付き合っている」

などと言いながら、僕に期待するような視線を送りながら反対側も回避行動不可能な状態に。

…これって逃げ場なし？

「さあ！」

「答えて！」

…これはどうを答えるべきなのか  
僕がそう考え始めた時だった。

ピン ポン パン ポン

何処かのデパートでよくなりそうなチャイムの音がした。

『えゝ本校生徒の呼び出しをします。二年A組の龍之由美さん、C組の沖田歩美さん保護者の方が来ていますので至急、校長室に来てください。繰り返しお知らせします』

『……………』

二人とも固まった。

そして顔を見合わせて

「この続きはまた今度ね」

「ふん、望むところだ」

そして…

「では優貴、また放課後だ」

「月見君また会おうね」

そう言って二人は出ていった。

「…嵐の出来事ってこう言っただな」

なんだかほっとしたような。

寂しいような…複雑な気分だ。

それからは何事も無く今日の学校は無事に終わった。

しかし…… 一体なんであんな事になったんだ？

とまあ当然の本人は気付いていなかった。

## 第壱拾壱話：誤解と恋となんとやら

今週は大変だった。

何故か僕の席によく来るようになった沖田さんと龍之さん。

まあ別に僕としては話し相手が増えるでよかった事だけど……

その日以来、何故だか男子には睨まれるし、怒鳴られるし、ファンクラブが色々としてきたり（思い出したくない）

女子は女子でよく解らない事を僕に聞いたり、トトカルチョの為にあしるとか（その他色々）五月蠅く言われたりした。

おかげで思いつきり疲れた。

何故こうなったのかは原因は未だ不明。

一度、賢治に聞いたら……

「……二人とも苦勞するな」

と苦笑いをしながら答えを返した。

まあそんな疲れた平日は終わって今日は休みの土曜日。

今日は家でのんびり皐月と茶を啜っている朝方のことである。

「……平和だな」

朝からのんびりと茶を啜っている僕。

ちよつと年寄り臭いが、これってなんだか和むんだよね

まあ、最近学校にいるあいだは人の視線を凄く感じるからおちつかないと言つこともあるんだけどね。

「……優にい」



同じく茶を啜っている皐月。

「なんだい？」

「最近学校で変わった噂がながれているの」

「へえ…どんな？」

それを聞いたら何故か皐月はいつもより無表情な感じになった。

……本来ならこの辺りから気付くべきだった。

いつもの大人しい皐月ではなく変に困っている事に

「その噂によれば、ある男が学校の美女や美少女を手込めにしていると…」

「ふん…そうか」

それは恐い噂だな。

そう思いながら茶を啜る。

「じゃあ、皐月も気をつけろよ」

まあ皐月のことだから、万が一そうなったら確実に相手を潰すだろ。なんせ格闘技じゃ、皐月は僕より強いからな。

そしてその話は終わりの筈だった。

その後の言葉が無ければ……

「……優にいが」

「なにが？」

「優兄が手込めにしてるって噂」

ブツ

！！！！

思わず飲んでいたお茶を吐き出してしまった。  
そんな僕の反応に皐月はノーリアクション。

「な、なんだそれは！？」

いつ僕がどうしてそうなる！？

はっ！？　もしかして………　なんだか最近やたらと人の視線が多かったのは噂が原因か！？

そう悩んでいる僕に。

「……うそだよね？　優にい」

皐月が僕を信じるような目で聞いてきた。

何だかさつきから表情が変だとは思っていたがこれのせいか…

「当たり前だよ。嘘だよそれは」

やんわりと僕が答えたら。

「……そう…そうだよね」

信じてくれたのか、さつきよりは普通になった。  
と思っていたら

「……けど、皆に迷惑をかけるなら私で我慢して」

全く困った事に全然信じていなかった。  
 それどころかさらに凄いことになっている！

「ちよ、ちよいと待った！！　なんでそうなるの！？」

「えっ？ 私が嫌なの？」

何故泣きそうになる？

そして何故上目遣いで僕を見る？

「優にい」

いきなり僕の服を掴んできて

「……覺悟」

そのまま押し倒されてしまった。  
 つてちよいと待てえい！！

「だ、大丈夫。私は……私は……」

何がどう大丈夫なのかがよく分からないが、かなり暴走している事だけは確かだ。

これが若さの勢いって奴か……って

「ちよ、ちよつとまでええええええええええ!!」

人は暴走すると壊れると言う教訓を得た僕であつた。

そんな魂の叫びから数十分後

誤解を解くのに大変時間が掛かってしまった。

「解った？ 僕は別にそんなやましい事はしてないし、別に皐月が嫌いな訳でもない」

皐月に正座をさせてじっくりと説明した。

「…解ってくれた？」

そんな僕にこくりと頷いて納得した。

「わかってくれたか」

この誤解を解くのにこんなに時間が掛かるとは……噂というのは恐ろしい。

だがここで一つの疑問が残る。

「……どうしてこんな噂がながれているのだ？」

そう、なんで僕の噂なんだ？

それに…

「皐月は噂って信じないはずだよね、どうして信じたの？」

そう。皐月は噂を殆ど信じない。なぜならその噂となった人が『噂

通りとは限らない』とちゃんと理解しているからだ。なのに今回は信じた…何故？

「そつ、それはその……」

ちよつと頬が赤くなつて。

「その……こ、こまるから！」

「ああ！ 成る程」

納得した僕に皐月が

「え！？ わ、わかつたの！？」

何故だか動揺した。

なんだか、いつもの皐月とは違ってちよつと面白いな。そう思いながら

「まあね。皐月は僕が……」

「わあああああああああああ……！！」

全力で僕の発言が妨害された。

「う、上に行つて休んでくる……！！」

それだけを言い残して全力で走つて行つた。

「……なんだつたんだ？」

目を丸くしながら

「皇月は僕が学校で噂になると迷惑がかかる。って言おうとしただけなのに？」

これはこれで謎のままだった。

そしてこの後、さらなる緊急事態が起きるとは…

「さて、お昼は何つくろうかな」

全然これっぽっちも思っていなかった。

## 第卅拾貳話：突然の出来事

それは平凡な一日が半分ほど過ぎた時だった。

「うーん。もう今日はやることは殆どしたな」

家事に洗濯に掃除。

これらを休みの日に全て行うのが月見優貴の日課だ。

「……だけど、ちょっと張り切りすぎたかな？」

周りを見渡すと見事に綺麗になっていた。

埃どころか塵一つも落ちていない。

気むずかしい姑さんだって文句を付けられないくらいだ。

「じゃあ、あとは自分の部屋でも掃除しようかな」

なーんてのんきに鼻歌を歌いながら自分の部屋に行くと……

「……………」

僕の部屋で女の人が寝ていました。

「……何でだろ？ 最近色々あったせいかな？ 女の人が寝ているように見えるよ」

ちょっと目頭をほくしてもう一度見てみるが。

「…変わらないな」

悲しい事に現実が変わらなかった。  
さらによく見てみると

「あれ？　もしかして龍之さん？」

そう。その女の人は龍之由美さんだ。

いつも髪は一纏めにしてあるのに、今日は髪をおろしている。

それにいつもの活発な服装とは違い、白いワンピースを着ていた。

……髪形と服装がいつもと違っていたため、一瞬、誰だか解らなかった。

それにしても…服装と髪形を変えるだけでこんなに印象が違うとは…

って！　そもそも、なんでこのの人がここにいるんだ！？

そう思ったときだった。

「…ん？　風？」

急に風が入ってきた。

あれ？　確か窓は掃除をした後、閉めたはずなのに…そう思って窓の方を見たら

「……なんだこれは」

よく見てみたら、ガラスが円形の切り取られていた。  
間違いなくそれは犯行が行われた証拠だった。

「…塀の次は窓ガラス、か」

窓の役目が見事に無くなった。



つてか、来るたびにこの人は壊していくな…  
なんだか泣きたくなってくる。

が、それはさておき、一体この人は何しに来たんだ？  
とうの本人は寝ているため話にならなし

「とりあえず、起こしますか」

そうしないとこの人はずっと寝てそうだな。

「起きてください」

ゆさゆさと揺らす。

「うゝん…もう少し寝かして…」

寝返りを打ちながら寝言を言う。

しかもいつもとは違ってなんだか子供っぽい感じがする。

「ダメですよ。早く起きてください」

更にゆさゆさと揺らす。

「うゝん…分かった」

渋々起きた…が、問題発生。

「おお、ゆづき？」

いきなり抱きついてきたのだ。

「わ！？ な、なに！？」

いきなりの事態に僕は戸惑った。

さすがに抱きつかれると僕だって…まあ色々よね？  
そんな僕を余所に更に抱きついてくる。

「ゆうきだ〜ゆうきだよ〜」

僕の名前を連呼する龍之さん。  
明らかに寝ぼけている！

「ゆうき〜」

そしてその瞬間、僕が思ってもいなかった事になった。

「えへへへ〜」

ニコニコ笑いながら僕の眼鏡を取った。

「あ！ ちょっと」

僕が文句を言おうとした時、僕は言えなかった。  
なぜなら…

「！？」

なにか柔らかい物が僕の唇に触れていたからだ。

一瞬なにが起きたのか分からなかった。

だがそれはずっと僕の唇に触れ続けていた。

それは龍之さんの唇だった…

第壱拾参話：キスと記憶の混沌（前書き）

この辺から話が大幅に変わっていきます。  
では…どうぞ。

## 第壱拾参話：キスと記憶の混沌

龍之さんにキスされている…

意識すればするほど顔が赤くなるのが自分でもわかる。

やばい…これは非常にやばい。

これが緊急事態とは言わずに何という？

それにどうしてこうなったのかは知らないが、これ以上は僕の理性が持たない。

そう思った時だった。

「…んっ？」

妙に変なにおいが鼻を刺激した。

「…お酒のにおい？」

なぜかお酒のにおいがする。

どこからしているのか気になって周りを見てみると…

「う、うーん」

先程から寝ぼけている龍之さんから微妙にお酒のにおいがする。

……これってもしかして寝ぼけているのではなく、酔っているのか？

「だ、大丈夫ですか？」

なるべく刺激を与えないように、小さい声で問いかける。

「うっ…あ、あたまが痛い…」

…明らかに二日酔いの症状だ。  
そして確定した。この人は酔っている。  
ふと龍之さんが顔を上げれば…

「あ、あれ？　なんで優貴がここにいるのだ!？」

ビックリしたように周りを見渡た。

…やはりボケていたらしい。

「いや、だってここは僕の家だから」

「……あれ？　私は家に帰って寝ていたはずだが？」

本人は不思議な表情をする。

まあそうだろう。

実際に自分の家だと思っていいたら他人の家にいるんだから、ビックリするだろうなあ。

…色々とツツコミどころがあるけどね。

「しかし、優貴よ。お前は以外と……」

頬を赤くしながらちよつと嬉しそうに何かを言った。

「え？」

『何が?』と聞こうとした時だった。

僕の後ろの方から凄い殺気がした。  
あわてて後ろの方を見てみると

「……………なにしているの？」

皐月が立っていた。

だがそれはいつもの皐月ではない。

目線は氷のように冷たいし、明らかに殺意がある。

しかもその目線の先は僕ではなくて…

「……………この人って、あの有名な龍之由美って言う人だね…」

龍之さんに向けられていた。

皐月に前に一度家に来たことを忘れていたのでは？

と言いたかったが、あえて口には出さなかった。

……………今何か言ったらただじゃすみそうにないし、何より怖い。いつ

もはのんびりとしているのに、今日の皐月は一段と怖い…

そんな冷たい目線を受けている龍之さんは

「……………」

微妙に顔が引きつっている。

やはり龍之さんでも、今の皐月は怖いらしい。

「……………これはどういうことかな？ 優にい」

顔は笑顔だが目線は氷河期だ。

午前中の皐月とはもう地球と海王星までかけ離れた状態だ。

しかも彼女の手を見れば…

「あ、あの……………なんで青龍刀を持っているのかな？」

そう、我が妹の手にはいつの間にか青龍刀があった。

「……もしもの時のためだよ。優にい」

そのもしもって何ですか？

って聞いたら、きつと真つ二つになりそうだな。

「…で？ 勿論説明してくれるよね？」

「わ、わかりました」

我が妹ながら逆らえないなーと思う僕だった。

やっぱり僕ってヘタレかな？



## 第壱拾四話：どうにもならない状況

「……と、言うわけです」

あれから1時間。僕らがどうしてこうなったのかを一から説明した。初めから説明すると以外と長い物ので、結構色々な事が起きたんだなーと思いつながら皐月の反応を見た。

「……そういう事なのね」

怒っているのか、それとも驚いているのか：多分両方だと思うが、そういった微妙な表情をしながら悩んでいた。

まあ、僕もそう思う。

僕だって未だに信じられないからなあ…

と思っていたら

「…だけど納得はいかない！ 優にい！ 早くその人と別れなさい  
！！！」

龍之さんを指さしながら強い口調でそう言ってきた。  
勿論、そんな反応を黙って聞いていない人物がいる。

「まて皐月殿！ 私は優貴と別れる気はない！」

当然反応する龍之さん。

「五月蠅い！ あんたなんか彼女だなんて認めない！ それに優に  
いの事呼び捨てにするな！！！」

いつもの皐月にしては冷静さが無くなっている。  
心なしか、焦っているようにも見える。

「ふん、いくら言っても優貴は私の物なのだ！ それに皐月殿には  
関係ないだろ！！」

さて、僕は物じゃないぞ。

「何があなたの物よ！？ ふざけるにもほどがあるわ！！」

「ふざけてなんかいない！ 優貴は私の物だ！！」

段々と過激になっていく二人。

なんというかこれが女の戦いつて奴なのか？

…恐いぞこれは

そう思いながら傍観していたら

ピンポン

と家のドアのチャイムが鳴った。

…こんな時に誰だ？

と思いながら二人を見た。

「だから何度言えば解るのか！ 優貴は私が一番好きなんだ」

「寝言は寝て言え！！ 優にいは誰にも渡さない！！」

思いつきり聞こえていない。

やはり今の二人には無理か、ここは僕しかない。

……それにいつまでもここにいたら、前のように巻き込まれそうだしね。

早々と出て行って、玄関の方まで行った……ら？

「やつほー こんばんわ。月見君」

そこにはなんと沖田さんがいた。

「あれ？ どうしてここに？」

「たまたま近くを通り過ぎたから来てみたの」

「……そうなんですか？」

住所は教えてないはずなのに？

「そこはほら、乙女の感よ」

……。

「……本当にたまたまなんですか？」

とても怪しんですけど。

「た・ま・た・ま・です……！」

大きな声で怒鳴られた。

「……わかりました」

勿論、それに反論出来る僕ではない。  
なので大人しく聞き入れた。

「それにしても私を疑うなんて酷いですね」

「…そうかな？」

「はいそうです。おかげで私の純粋な心は痛く傷つきましたよ」

……その割には棒読みですね。

それに、なんか嬉しそうですけど…

そしていやな予感がした。

こついったときだけ当たる妙な勘。

「だからデートしてください」

「……はい？」

なんだか変な単語が聞こえた。

「デートですよ。してくれますよね？」

…デート？

何故にそんな風になる。

「してください」

その言葉には強い意志みたいな感じがした。  
だかその言葉に反応する物達がいた。

「デッ、デデデデートだと!？」

「何でそうなるんですか!?!」

先程から部屋で口論をしていた二人だった。

「あら？ あなた達には関係ありません」

冷たくあしらった。

だかそんなことで引き下がる二人ではない。

「貴様がなんで優貴とデートをするのだ!?!」

「そうよ！ 優にいは忙しいの！ あんた達の相手をしているほど暇じゃない!」

なんだかよくない空気になってきた。

……さすがにこれはやばくない？

こんな時には…

こんな時には……

「……とっ、とりあえず。みんな部屋に入ろうか？」

良い案が思いつかなかった僕だった。

第壱拾五話：修羅場って大変だ！ 主に僕が

考えるべきだった。

この三人が揃った時点でどうなるかということに…

「……………」

「……………」

「……………」

居間に入ってから三人とも恐いくらいの無表情。

互いに、相手を警戒しながら様子を目だけでうかがっているだけで、誰も喋らない。

無言の空間だけがこの居間を支配している。

はつきり言って恐いです。早くこの場から立ち去りたい！

これが僕の本心です。

だがこの三人を置いて僕は逃げれるのだろうか？

それは無謀、あるいは蛮勇に等しい。

…ならこの状況をどうするべきか？

そう悩んでいる時に最初に沖田さんが口を開いた。

「…そう言えば自己紹介がまだでしたよね」

ここにいる全員に聞こえるように言いながら

「私は沖田歩美と言います」

そして…皐月の方を見ながら言い出した。

「あなたのお兄さんの月見優貴君とは、色々大変お世話になっています」

今、何だか色々って所を強調したような…  
そう思いながら皐月の方を見てみたら。

「……………」

額に青筋を立てながら、明らかに不自然な笑顔になった。

それと同時に変な事が起きた。

バキッ！！

突然、後ろの方で物音がしたのだった。

そっちの方を見てみると、置いてあったラジオ（今年買ったばかりの新しい物）が凹んでいた。

だが、そんな事はお構いなしに話は進む。

「……………そうなんですか？ それははっきり言って迷惑ですよ」

皐月は先程よりはましな笑顔で（明らかに敵意をむき出したが）言う。

「優にいは困っていても断れない正確なんですから」

…言葉とは裏腹に『迷惑だから手を出してんじゃねえよ！』って言うているような気がする。

「とくにあなた」

皐月が龍之さんに向かって言った。

「あなたは怎樣ですか？ はっきり言って迷惑です」

威圧するように言う皐月。

それに同調したのか、沖田さんが皐月の言葉に「うんうん」と頷いていた。

……これは困った事になるんじゃないか？

そう思いながら龍之さんを見てみると、以外と落ち着いていた。

「…私は龍之由美だ」

落ち着いた口調で言う。

「確かに私は迷惑をかけているかもしれない。それについては詫びを入れよう」

意外な事に一番怒りそうな彼女が一番大人だった。

「まあ、優貴と私が迷惑をかけるのは恋人同士だからな。仕方がないだろ」

いきなりそんな事を嬉しそうに言った。

……前言撤回。全然大人じゃありませんでした。

それになにが仕方がないんですか！

元々は龍之さんが原因でしょうが…



って！ 今の状況で変な事を言ったら……

「はぁ！？」

「……ム力つく……」

二人の怒りの圧力が空間を支配した。

その圧力はあまりに強い。空間が湾曲するぐらいに強かった。

そのおかげで

バキッ！！

メキッ！！

ドカッ！！

グシャッ！！

家の至る所から嫌な音がする。

…このままでは威圧で家が崩壊しかねない。

ここはどうにか…

どうにかしないと……

そんな時にふと思いついた事を言った。

「みつ、みんなでゲームをしよう！！」

そんな僕の発言にみんなは

「優にいがそう言うなら」

「私もする」

「無論、私もだ」

無事に納得した。

その時は良いアイデアを思いついたな～と思っていた。

…だが、あとで自分の言った事を後悔する羽目になるとは微塵にも思っていなかった。

第壱拾六話：賭け事には犠牲が付き物だ！ 前編

さっきまで晴れていた空は、いきなりの悪天候になっていた。

そしてここ、月見家ではそれと同じ…いや、それをも凌駕する程の異様なまでの天候だった。

「…悪いがこの勝負、勝たせてもらおう！」

「あら、残念だけど、勝つのは私ですよ」

「……二人とも後悔する」

殺伐とした雰囲気な三人。

こうなってしまったのはつい先程、僕が調子に乗って言った一言がこの原因である。

（数分前）

「で、なんのゲームをします？」

さっきはあんな事を言ったが、実はその内容はあんまり考えていなかった。

「そうだな…ではカルタ大会と言つのはどうだ？」

何故にカルタなんですか？

「色々あるんだ。主に作者の事情とか」

…今、変な事を言った気がするけど気にしないでおう。  
それより他の二人がどうするかが解らない。

「二人ともそれでいい？」

二人の様子をうかがいながら聞いてみた。

「うん。いいよ」

「……同じく」

どうやらそれで良いらしい。  
なら早速始めるとしよう。

まずはカルタの絵柄のある方をバラバラにしてばらまく。

次にカードの読み手を一人決める（因みにこれは僕）

まあやることと言ったらこれだけである。

「じゃあ、初めて良いかな？」

まあここまで来ればあとは始める以外に何もないはず…と思っていたのが間違だった。

「あ。そうだ」

いきなり声を上げる沖田さん。

「どうかした？」

「罰ゲームですよ」

「……罰ゲーム？」

いきなり何を言い出すんですか。

「そうです。やはり罰ゲームがないと面白くないです」

自信満々に言う沖田さん。

「確かに、一理あるな」

いやまて。

何処がどうして一理あるんだ。龍之さん

「では罰ゲームは負けた人は『一生優にいに近づくな』ってのはどうですか」

淡々と言う皐月。

「……つまり何が言いたい？」

「一言で言えば『二人とも優にいに今後一切関わるな』と言うことです」

「……やはり皐月殿とは、これからじっくりと話さねばならないな」

「……最大の敵はやっぱり身内だね」

二人とも立ち上がって戦闘態勢を取った。

「……返し討ちにする」

同じく皐月も立ち上がった。

……あれ？

これって初めに戻っちゃうんじゃない？  
いかん！

「ちょ、ちょっと待った！」

慌てて三人を止める。

「喧嘩はダメです！ 今は罰ゲームの話でしょ？」

「だが……」

「なら、今は罰ゲームを考え」

「思いついた！」

先程よりもでかい声で言う沖田さん。

……ところで何が？

「罰ゲームだよ！」

「…それは先程みたいに变な事には」

「勿論なりません」

そして自信満々に

「誰もが納得する理由ですよ」

成る程。

それなら良いはず……と、思っていたのもつかの間だった。

「勝った人は一日。月見さんとデートをする」

「ちよい待てえい!!」

何ふざけた事を言っているんですか!?

「別にふざけなんていませんよ?」

にこりと笑いながら嬉しそうにしている沖田さん。

「じゃあなんでそうなるんですか!?!」

それじゃ、僕だけ罰ゲームじゃないですか!?

「言い出しっぺが文句を言わないでください」

「いやいや、言い出しっぺは沖田さんですよ」

「まあ、そんな事はあっちに置いて」

無理矢理はなしを終わらせた。

っていうか、今自分で言った事を無かった事にしたよね？

「それに元をたどれば月見さんが言い出しっぺですけど？」

「たっ、たしかに…」

ゲームをしようって言い出したのは僕ですけど…

「まあ、何らかのリスクがあった方が面白いじゃないですか」

や、そのリスクは主に僕しか背負わないけどね。

「それに他の人も納得しているはずですよ」

自信満々に言う沖田さん

逆に僕はと言うと…

「そっ、それはどうかな？」

そんなどうでも良いような事で納得するはずがない。

そう思っていたのだが

「そっ、それはいい！」

「私もそれで納得です！」

勢いよく承諾してくれました。



「ね、納得してくれましたよ」

嬉しそうに微笑む沖田さん。

「皆がそう言うならいいけど…本当にいいの？」

自分でも言うのもなんだが、あんまり得くにはならないと思うけど…

『いいです!!』

即答だった。

「……じゃあ、それでいいです」

斯くして、ここ月見家でカルタ大会が始まったのだった。

第壱拾七話：賭け事には犠牲が付き物だ！ 後編

「じゃあ、始めるけど…準備はいい？」

一応確認をしておかないと、また何を言われるかわかったもんじゃないからね。

「いいぞ」

「いいよ」

「……大丈夫」

もうこの時点で集中しているらしく、言葉数が少ない。  
つか、この集中力をもっと他の事に使ってほしい。

「ではまず初めに…犬も歩け」

バシ

ン！！！

我が家が揺れるほどの轟音が響いた

「…え？」

一瞬なにが起きたか解らなかった。  
僕が気付いた時には

「ふっ、悪いな二人とも」

不敵に微笑む龍之さん。

「くっ、あと少し早ければ」

「……悔しいです」

本当に悔しそうにしている。

勝負は一瞬で終わったようだ。

…が、それよりも気がかりなのは我が家の畳だ。

「畳にこんなにくつきりと三人の手形が…どんだけ凄いなだよ」

三人の手形がくつきりと畳についていた。

ホント…涙しか出てこないよ。

こりゃあ、そろそろ畳も換えないといけないのかな。  
そう悩んでいたとき

「早く次をお願いします！」

沖田さんが先程の悔しさを晴らすように言った。

「え？ あ、はい」

そしてまた静かになる。

「じゃあ…猿も木か」

ドカアアアアン…！

またずざましい音がした。

そもそも効果音があり得ない。

なんで地雷が爆発したような音なんですか…

「とりました！」

今度は沖田さんがとつたようだ。

「くっ」

さっきはとつていた龍之さんが悔しそうにしていた。

「……………」

皐月に至つてはもう恐いくらいに無言。

「じゃ、じゃあ、次いくよ」

次の札を取つて読み上げる。

「えっと…柵からばた餅」

今度は最後まで読み終えた。

「……………」

「……………」

「……………」

……あれ？

今度は誰も反応しないぞ。

「優貴、どこにもないぞ」

「確かにありませんね」

龍之さんと沖田さんがカードを見ながら言う。

「……ふっ」

何故か皐月が笑った。

「もしかして……これを探しているの？」

そう言って見せたのは、僕が読み上げた札だった。

「あまりにも遅かったから……つい、ね」

明らかに挑発するように言う。

「……あなた達にはこのカードのように、影から消えてもらいますけどね」

意味深に言う皐月。

そして二人はと言うと……

『……………』

無言になった。

恐いくらいに無言。

異次元から何かが出てきそうなくらいな雰囲気になっていた。

…そして

「……やっぱり、妹さんだけは倒すべき敵ですね」

「同感だ。私もそう思う」

なにやら共感を得たらしい、沖田さんと龍之さん。

「ま、まあ、勝負はこれからだよ」

一応、なだめてみたがもう無駄だった。  
三人ともいやなスイッチが入ったらしい。

…その結果…

「  
勝った」

勝利したのは龍之さんだった。

「く、くやしい…」

メツチャクチャ悔しそうな顔をしている沖田さん。

「……………」

同じく悔しそうにしている皐月。

そして僕はと言うと…

「……………泣ける」

見るも無惨になった畳。

穴が開いたり、一部が凹んでいたり、何故だか知らないが青龍刀や日本刀が刺さっていたりと、凄まじいことこの上ない状況だ。

「……………今月は赤字かな？」

家計簿を見るのが少しだけ嫌になった。

## 第拾八話：どうしようもないこと

あの騒がしい土曜日が過ぎてから数日

それは突然言い渡された。

「月見。明日学校を休め」

「……はい？」

今日のお勤めを（主に精神的に）果たし颯爽と我が家に帰ろうとしたところ、いきなり担任の有馬先生に不思議なことを言われた。

「……それって僕に明日学校に来るな。と言う事ですか？」

「おう。そうだ」

この担任は一体何を言っているんだ？

はっ！ ま、まさか担任も嫌がらせをするきなのか！？

「お前は壮絶的な勘違いをしているな」

そう言っつて、鞆から書類とバスの空港行きのチケットを出した。

「実は来週からうちのクラスに転校生が来る」

それが明日学校に来なくていい理由とどう関係があるのだ？

「その子は留学生でな、まだこの地域に不慣れなんだそうだ」



「へえー」

「そこでだな、ここは担任として校長に出迎えを命じられたのだ…  
不本意ながらな」

それは担任が言う台詞か。

「ところがだ。明日から急な用事が出来てしまつてな、俺は出迎え  
に行けなくなつてしまつたのだ…ラッキーな事にな」

そう言つて僕の方を見る有馬先生。  
心なしか嬉しそうにしているのは……僕の気のせいではなかった。

…なんだか嫌な予感がしてきた。  
ここ最近妙に当たる嫌な感。  
その感が警告していた。

このままでは危険だと！！

「ここまで来ればわかるだろ？」

「いえ、解りません」

そして回れ右

「帰らして頂きます」

そのまま帰ろうとした。

「まあ待て」

見事にがっちりと捕まえられてしまった。

「解らないのであれば教えてやる」

「いいです！ 謹んで遠慮します！」

そんな僕の抗議は無視され

「月見…明日、その子の出迎えを俺の代わりにしてくれ」

やっぱりそういう事か。

「それにしてもなんで僕なんですか？」

そう言った事は、賢治とか龍之さんとか普通は優秀な人に頼むですよ。

「いや、俺はお前に頼む」

そこで一端真面目になり。

「もし明日、このクラスで何かあったら…お前責任とれるか？」

「…とれませんけど」

「だろ、それにお前が行くと後々おもしろ…」

「おもしろ？」

「ゲフンゲフン！ … いや何でもない、気にするな」

なんか今一瞬本音がでたような気がするが…気のせいかな？

「それにお前一人居なくなっても、別にどうって事無いしな」

今何気なく酷い事を言われた。

こいつ本当に教師ですか？

「理不尽すぎます」

当然抗議するが

「まあ、気にするな」

そう言って資料とバスの空港行きチケットを無理矢理僕に渡して行ってしまった。

しかも逃げるのにその間5秒

「…………… どうしてこう厄介ごとが僕にまわってくるのかな？」

そんな事を言っても誰かが答えてくれる訳でもないんだけど、そう  
呟かずにはいらなかった。

「あつ、因みに」

厄災がまた帰ってきた。

「俺は明日から学校に来ないからな」

「は？」

今なんと？

「その代わりに明日から新しい担任が来るはずだから……そこら辺よろしく」

そう言っただけで去ってしまった。  
ってちょっと待てえい！！

「僕にどうしろと！？」

そうは言っただけでいないため叫んでも仕方がなかった。

## 第拾九話：迷惑千万（前書き）

第拾参話をちよいと訂正しました。

それだけです。ってか、訂正するだけなのに遅くなってごめんなさい。

## 第拾九話：迷惑千万

バスの中でゆらゆらと揺れてやって来た場所は、空港の到着ロビー  
平日なのに意外と混んでいたので、見渡しの良い後ろの方で待つて  
いた。

「ここまで混んできると探しようがないな」

一人ポツンと突っ立っているのは月見優貴。

出迎えとそのホームステイ先へ案内。それが任された事だった。  
まあ、無理矢理任されたことだけど

「…それにしても人が多いな」

周りを見るかぎり人だらけ、こんだけいけば見つかる人もなかなか  
見つからない。

それ以前に相手がどんな人かも解らない。

「まったく、どんな人かも解らないのに探せだなんて…」

と言ったところでふと思い出す。

そう言えば渡された書類があっただけ。

「あれに何か手がかりとかなないかな」

そう思って持ってきた鞆から昨日渡された書類を見ると、中か  
ら詳細データとその留学生の写真らしき物が出てきた。  
内容はこういったものだった。

名前はクリス・シュナイゼル

フランスのクライアン高校からの留学生

性別は女性

身長は170cm（僕より少し高い）

体重は：書いてない（多分修正したんだろう）

年齢は僕と同じの十七歳

得意な分野は理数系

スポーツはそこそこ出来る（何故か剣道だけは師範級だった）

備考：小学校まではここに住んでいた。

これが先生（元担任）から渡されたデータである。

写真の方を見てみれば：多分、東欧系であろう。

凛々しい顔立ちにショートカットの目立つ金髪

瞳は淡い瑠璃色

間違いなく美人といえる人である。

但し、問題点が一つあった。

別に容姿や性格に問題があるわけではない。

むしろパーフェクトなぐらいだ。

ではその問題は何かというと……備考を更に読んでいった所に書いてあった。

備考：月見優貴と結婚のため花嫁修業をする。

「……………」

あれ？ おかしな…

眼鏡にひびが入っているのかな？

一度眼鏡を取って

ハンカチで拭いて

また掛けなおして見た。

しかし変わらない物は変わらない。

むしろ眼鏡を拭いたため綺麗に見えてしまった

「……………」

開いた口が塞がらないとはまさにこのこと。

「なつ、なんで僕の名前が…？」

そう何故だか知らないが、僕のことを相手は知っているのだ。  
それも何故だか知らないが結婚相手として

「…はめられた!？」

あの教師はこのことを知っていて頼んだに違いない！

これは今からでも帰ろうかと悩んでいたがすでに遅かった  
何故なら…

「おまえが出迎えの人か？」

「へ？」

話しかけられた方を見ると



「出迎えの人であっているな？」

そこにいたのは写真で見たまんまの彼女  
クリス・シュナイゼルその人であった。

「そのころの学校ではと言うと」

「…今日は優貴は休みか？」

私、龍之由実はその席、月見優貴の席を見ながらそつと呟いた

「おや」今日もまたあちらを見ちゃって、本当やけるね」

そう言って話しかけて来たのは、一応私の親友の春野渚はるの なづなだった。

「ちょい待ち！ 一応ってなによ！」

「まあ気にするな」

そんなことよりも優貴の方が気になる。

いつもなら来ているはずの時間帯。

なのに今日はどうして遅いのだろうか？

そんなことを思っていたら

「すみません」

そう言って教室のドアが開いた。

そこにいたのは月見優貴の妹、月見皐月だった。

皐月殿は一度教室を見渡し…

「……泥棒猫」

私の方を見ながらそう言った。

「誰が泥棒猫だ!!」

全く失礼な奴だ。

「ところで皐月ちゃんはどうしてここに来たの？」

春野が皐月に聞いてきた。

…まさか私にそれを言いに来ただけだったらさすがに怒るぞ。  
だが、そうではなかったらし

「…優にいいお弁当届けに来た」

「は？ 優にいい？」

春野は誰のことか解らないらしい。

「……優にいいどこ？」

「優貴はまだ来てはおらぬぞ」

「……え？」

私の言葉に皐月殿は驚いた反応を示した。

「……本当に？」

疑うような仕草で私を見てきた。

「失礼だな、優貴の事で嘘などつくわけがなかるう」

そう言ったら信じたようだ。

だが、皐月殿は変な顔をしていた。

「どうしたんだ？」

「……おかしい」

「なにがだ？」

「……優にいは私より先に出た」

「はあ？」

「つまり？」

「……つまり優にいは既に学校にいるはず」

しかしいないもはいないぞ。

「……どうして？」

「それは私が知りたいぞ」

彼女たちの間に謎だけが残った。



第貳拾話：自体は悪化の方針で…

現在場所を移動して高速バスのバス停前、バスが来るまで時間があったため、荷物を脇に置いてしばらく待つ事にした。

さて、これからバスに乗ってクリス・シュナイゼルさんを連れてホームステイ先に行くのだが

「……………」

「……………」

会話がない。

会ってからすでに数十分、一言も喋らない。

僕のほうをちらちらと気にかけているみたいだけど一向に喋る気配がない。

まあ余計な事を聞かれるよりははるかに良いが、ホームステイ先を僕は知らないので彼女を送り届けようがない。

……さてどうしたものかなと色々悩んでいたときだった。  
意外な人物が僕のほうにやって来た。

「あれ、こんな所でなにをしているの？」

話しかけたほうを見ると、なんとそこに居たのは

「沖田さん？」

なんでこんなところに？ しかも私服で…

「今度、公演があるからその打ち合わせの帰りだよ」

嬉しそうに言いながら僕のほうに近づいて……

「……え？」

固まった。

いや正確には驚いていると言った方が正しいだろう。  
僕の隣の席を見た瞬間、微妙に顔が引きつった。

「……君は一体なにをしているのかな？」

何故だろう。先程と変わらない笑顔なのに妙に迫力があると言っか、  
何か変な感じがするのは気のせいだろうか？

「学校をサボってこんな場所で……もしかして逢引ですか？」

笑顔で毒舌だった。

「違います！」

何でそうなるんですか！

「じゃあなに？ 彼女ですか？ 恋人ですか？」

「いやいや、なんでそうなるんですか！？」

「じゃあ彼女にしたいですか？」

「え？ 彼女に？」

微妙に困った質問をしてきた。  
ここでもし……

『彼女にしたいですね』

と答えたら間違いなく沖田さんが怒る。  
なんで怒られるのか分からないけど、雰囲気で分かる。  
今の彼女は確実に怒るだろう。

しかしだ。

もし、もしだが、ここで

『彼女にしたいとは思いませんね』

と答えたら……何となくだがシュナイゼルさんが怒るかもしれない。  
まあそんな事はないと思うが、もしそうなってしまったら後々大  
変な事になる可能性もある。

……ここは当たり障りのないように答えるか

「僕として『やっぱり答えなくていい！！』」

「……………はい？」

僕が悩んで答えようとした矢先にとめられた。

「また月見君には早すぎる」

真剣な表情をしながら、わけの分からない事を言い出す沖田さん。

「あの…」

何がどうなっているの？

そう聞こうとしたら

「なに？ それともこの子を彼女にしたいの！？」

「い、いえ、そうじゃなく…」

「やっぱりそうなの…そうなのか？ ふざけるなあ！？」

逆切れされた揚句に怒鳴られた。何故に？

「ちょ、ちょっと落ち着いてください！」

慌てて宥める僕。

しかし沖田さんは止まらない。

「これが落ち着いていられる？ 無理だよ！？」

微妙に涙目になりながら僕のほうに言い寄ってくる沖田さん。  
…そんな時だった。

隣に座っていたシュナイゼルさんが口を開き…笑った。

「くふふふ…あはははは！！」



そんな彼女を僕と沖田さんは驚いてみていた。  
だってさ、さつきまでクールに黙っていた人が突然笑い出すんだよ。  
そりゃあ驚くわあ。

「ははは…はあ」

そして笑い終えて一言。

「お前達は面白いな」

と笑顔で言うんだから怒りようがない。  
むしろ馬鹿らしくなってきた。

「…ごめん少し混乱してた」

「うん。まあ気にしないでいいよ」

そう言って仲直りを始めたとき…  
急にまじめにシュナイゼルさんが僕らに聞いてきた。

「所でさつき月見とか言っていなかったか？」

「……………あ」

しまった。

どうやら重要な所を聞いていたらしい。

「い、いやそれは…」

どうにかして誤魔化そうと思ったが

「あれ？ 月見君自己紹介してなかったの？」

沖田さんが先に答えてしまった。

## 第貳拾壹話：ヒトスジ

（龍之由美からの視点）

優貴がいらないのにはきっと理由があると思い、皐月殿が教室に帰った後、すぐさまこの出来事に詳しくそんな人物の所に渚と一緒に行った。

「為るほど、だから俺のところに来たって訳か」

その人物とは優貴の親友の宮田賢治。  
自分の席に座って携帯を弄くっていた所を発見。

「それにしても……なんか久しぶりの出番だな」

いきなり訳の分からない事を呟いた。

「なんのことだ？」

「気にするな、ただの戯言だ」

ふつと微笑む宮田。

周りの女子や渚が奴の微笑を見て赤くなっている。  
まあ私は優貴一筋なのでどうって事ない。

「で、優貴の事について知りたいんだろう？」

「その通りだ」

「なら良いタイミングだったな」

何が？

「ほらこれ見てみる」

そう言って宮田は自分の携帯を私に渡した。

「これがどうした」

私は優貴の事が知りたいんだ。

お前の携帯になんぞに興味はない。

そう思っただけに携帯を渡して…

「私は優貴の場所を知りたいんだ」

そう言ったら宮田は苦笑して

「まあ焦るな、俺の携帯の受信覧を見てみる」

そう言ってきた。

「受信覧？」

私が疑問に思ったとき渚が声を上げた。

「…何これ？」

渚が微妙な顔をしたので私も気になって見てみたら

「…これが言いたかったのか？」

「そうだ」

「…確かにこのメールを見たらどう答えたら良いか分からないな。  
何故なら

『緊急事態発生です。至急応援を…今すぐ助けに来て！ 僕だけじゃあ無理です！』

「…一体どうしろというのだ？」

私は見た瞬間そう思った。  
そして渚は

「月見君って一体…」

微妙にコメントにも困っているようだ。確かにこれはコメントが難しいな。

っていうか一体優貴はなにをしているのだ？  
そんな私達の疑問に宮田は答えてくれた。

「きつとまた不幸な目にあってるんだろ」

平然に言う宮田。

「……………」

何となく理由はわかる。

が、その不幸な出来事の矢先が私なのだから言い返せない。

「まあいつもの事ながらよく色んな目に遭うな」

遠い目をしながら懐かしそうに言う。

「…そうだな」

いやもう本当になんて言ってよいやら。

「もしかして昔からこうだったの？」

渚が興味深かそうに聞いてきた。

「そうだ。あいつは何て言うか『不幸に好かれてる』って感じだな」

そいつはまた嬉しくないな。

「まあ、あいつにとっては日常茶飯事ってとこだな」

そして最後に独り言のように呟いた。

「……なのに誰にも頼ろうとはしない。いつも一人、あの時も……」

一瞬暗い表情になったのが、何事もなかったかのように先程と変わらない表情で聞いてきた。

「で、どうするんだ？」

「何をだ？」

「助けに行くのか？ それとも行かないのか？」

そんな質問の答えは決まっているだろ。

「私は優貴のためには何だってするさ」

私がそう言ったらなぜか渚が驚いたように言ってきた。

「へえ」 由美からそんな言葉が聞けるなんて…本当にどうしたの？」

「なに簡単な事だ」

私は笑顔で言った。

「好きな相手のためなら何だってしてやれるからな」

そんな私の言葉に渚……ではなく何故か教室の男子が叫んだ。

『くそおおおおおおお！！！月見のやつつつつつつつ！！！！』

『羨ましい！！！！うらやましいぞおおおおお！！！！』

『ただでさえ我が学園のアイドルを二人とも独り占めしているというのに！！！！』

『めがねのぶんさいでええええええええええ！！！！！！！！！！』

『くそおおおおおおお！！！！！！！！！！』

『ゆるせねええええええええええ！！！！！！！！！！』

『ころしてやるうつうつうつ!!!!』

『理不尽だああああああ!!!!』

教室にいた男子の殆どが泣きながら出て行ってしまった。

「……何なんだ一体？」

私が不思議そうに言ったら。

「さあね」

「まあ気持ちは分からんでもないがな」

苦笑している渚と宮田であった。



## 第貳拾貳話：人探しby皐月

～月見皐月の視点～

私はあの教室を出た後、すぐさま行方不明？の優にいを探すべくとある場所に向かった。

学校から歩いて約十五分。そのとある場所とは優にいのバイト先の喫茶店だった。

但しただの喫茶店ではない。ここは店長自ら、食材を採ってきている。

私から言えば、ちょっと変わった方法で運営をしている店。

「……おはようございます」

朝の静かな時間帯。

まだ店が開いていけど、いつもの事だから勝手にはいる。

「おや？ 皐月ちゃんかい？」

中に入ったら、カウンターに立っているごついおじさんが私に挨拶をしてきた。

このごついおじさんの名前は、こんどう近藤 はがね鋼。名前もごつい。この店のマスターである。

「こんな時間から珍しいね」

ダンディーな笑顔であるが、妙に迫力がある。

例えるなら、歴戦の傭兵って感じ。

「で、一体何の用だい？」

「優にいの居場所」

そう言ったら、マスターは少し驚いた。

「おや？ 優貴君は家出もしたのか？」

私は首を横に振る。

「朝から用があった。けど優にいがいなかった」

そう答えた。

「……為るほど」

マスターは納得して

「もしそうだったら、皐月ちゃんがそんなに落ち着いているはずもないしな」

……確かに否定はしない。

「残念だが、わしの所には来ていないな」

「……そう」

じゃあ、何処に行ったのだろうか？  
私は少し考えて

「……昨日、優にいが何か言ってなかった？」

そう聞いたら。

「うーん。…そう言えば昨日『人を空港まで迎えに行く』って言うてたな」

為るほど、と言う事は優にいは空港にいるのか。

……あれ？

「……マスター。その『人』って誰？」

「さあ？ わしもそこまでは聞いていないからね」

「…そう」

まさかあの人が帰ってきた？

……いや、その場合私の所にも連絡が来るはず…  
じゃあ一体……誰？

「……ま、いいか」

ある程度の情報は集まったし。  
実際に行けば分かる事だし。

「…ありがとう、マスター」

「お礼を言われる程の事はしとらんよ」

先程と変わらず、笑顔で答えるマスター。

「じゃあ……またね」

私はマスターに別れ告げて外に出た。

早速、優にがいると思われる空港に…

「…あ」

空港の場所がわかんない。

「……ま、どうにかなるか」

そんな風に私が考えていたとき、携帯に電話が来た。

「誰？」

まさか優にこれから？

そう思っで急いで出てみたら。

『ちよつと皐月！ 一体なにしてるの！？』

誰かが大きい声で怒鳴ってる。

……誰？

『…今、あんた「誰だ？」って思っただろ？』

なかなか鋭い。

『あんたは友達の名前も忘れるのか？』

友達？

……あ。

「もしかして…香枝？」

『もしかして？　じゃなくて、その高坂<sup>こうさか</sup>　香枝<sup>かえ</sup>だよ！』

なんだ優にいじやなかった。

まあ、声が違ったしね。

「それで……何か用？」

『何か用？　じゃないでしょうが！！』

怒られた。

『今日は美術部のインタビューで、あんたが呼ばれてたでしょ？』

美術部……私が入っている部活だ。

そう言えば、先輩がそんな事を言ってたような……で？

「それがどうしたの？」

私がそう聞いた瞬間。

【プチッ】

何かが切れた音がした。

『あ・ん・た・が居ないと話にならないでしょうが！……！』

怒られて、怒鳴られた。

『早く戻ってこんかい！！』

ついでに口調も変わったようだ。

「でも」

反論しようとしたが。

『でもじゃない！！』

きっぱりと言われた。

『早く戻ってこなかったら……』

「……戻ってこなかったら？」

そこで少し間を空けてから。

『優貴先輩に言いつけとくからね』

「優貴先輩？」

その瞬間、私の頭の中で図式が浮かび上がった。

優貴先輩⇨優にい　言いつけられる　優にいに怒られる。

……怒られるのは嫌だ。

優にいが怒ったら…怖い。

あれは怖い…

滅多に優にいは怒らない…けど、前に一度怒られた事がった。

その日は恐怖で眠れなかった。あんなに怒った優にいは初めてだったし……なにより…

「……………う、ううう…」

恐怖で体が竦む。

思い出すのはよそう。

「わ、わかった！　すぐ戻る！」

『よろしい。なら早く戻ってきなさいよ』

そついい残して、香枝は電話を切った。

「…はあ」

優にいを探すのは後、か。

そう思いながら、早く学校に向かう事にした。

香枝がまた怒って電話をする前に。

## 第貳拾參話：知らない事情は難とやら

さてさて、この話は数時間前に遡る。

もっとわかりやすく言えば、第貳拾話に戻る。

\*\*\*

「やはりお前が月見だったのか」

シュナイゼルさんは僕の方をまじまじ見ながら

「あの…『やはり』ってどういう事ですか？」

「…顔は悪くは無い、どつちかと言うと結構良い方だし。それに何か武術をしているのか筋肉がそこそこついている」

僕をじろじろと見ながら、一人ぶつぶつ言い出す。  
「ってか僕の話を聞こうよ。」

「一体全体どういう事？」

沖田さんも戸惑いながらシュナイゼルさんに聞くが

「合格だな」

その言葉を軽く無視ししていた。



ところで『合格』ってなにが？

そう思った時、予想もしていなかった言葉を口にした。

「月見優貴。約束通り、私の『婿』になれ」

「……………え？」

「はい！？」

気まずい沈黙が場を支配した。

その結果。

「……………」

「……………」

「……………」

こうなってしまった訳です。

なんとも空気が重たい。

人ってその場の雰囲気であらゆる空間を作り出すんだな。  
確か前にもこんな状況があったような……………

「……………ねえ、月見君？」

笑顔で僕に聞いてくる沖田さん。

いい笑顔……………なハズなのになんかその笑顔が怖いです。

「あの人が言ってた『約束』について……どういふことが、私に解るようにキツチリと説明して」

「いや僕にも何がなんだか……」

僕も『約束』というのは本当に分からない。

「いいから、ほら……さつさと説明しろ」

最後だけ命令口調になっているのは……気のせいじゃありませんね。つてかなんで僕の事でこんなに怒ってるのだろうか？  
謎は深まるばかりだが、ここはあれだ。

少しでも落ち着いてもらわねば身の危険が……

という事で

「いや、ほら、僕にそう言われても……ね」

少しでも明るく言って、場を和ませようとしたら。

「ねえ月見君。『膾』と『開き』……どっちが良いと思う？」

額に怒りのバツテンマークをつけて、引きつった笑顔で言った。

「……………」

やばい！明らかに地雷を踏んでしまった！  
気分的には地雷というより核弾頭に近いけど、踏んで生き残れないという時点で似たようなものだ。

ってか、これはちゃんと説明をしないと生きて帰れそうにない。  
それに一歩間違えたら天国に行き……

「そうなる前に早く話してね」

そうしたいのは山々なんだけどねえ……

……あれ？

「なんで僕が思っている事が解るの！？」

僕が口に出して喋っていないのに……読心術か？

「月見君。芸能界を生き残るにはね、読心術は基本なのよ」

「…………へえー」

……いやな基本だ。

つか、芸能界ってどんだけ危険な場所なんだよ。

「だから月見君も覚えててね」

「お断りします」

「まあ今はいいですよ。後で嫌でも覚えさせますから」

僕は断ったはずだよね？

なんでそうなるの？

「それに嫌だったら、さっさと教えてください」

またそっちに話が戻ってしまったか。  
仕方が無い。一応知っている事だけでも教えよう。  
そう思っ、僕が説明しようとした時。

「私から説明しよう」

先にシュナイゼルさんが言った。

「……………」

沖田さんは黙ったまま睨んだ。

どうやら、あまり良い感じではないらしい。

ってか、助け船をだすのだったらもう少し早めに助けてほしかった  
んですけど…

と僕が言ったら。

「なーに、月見が困っている所を見てたら、そっちの方が面白くてな…」

クツクツク…と笑いながら言った。

…なんというか、あれだ。

きつと気にしたら負けなんだろう。

「……………もついいですから、早く言うてください」

「ならばそうしよう」

そう言いながらも未だに笑っている。  
そしてしばらく笑った後、彼女は語り始めた。

「そもそも、これはお前の父親の遺言でもある」

「月見君のお父さんの！？」

沖田さんはかなり驚いた。

だが僕は……それ以上に驚いた。  
だってそれは僕の予想外だった。

「僕の父さんが？」

それは一体どういう事だ？

どう考えても嫌な感じしかなかった。

第貳拾參話：知らない事情は難とやら（後書き）

次回、例のあの人が登場！

第貳拾四話：我が道進む、それが父！

「あの……僕の父親の遺言ってどういう事ですか？」

激しく嫌な予感がするが、ここは聞いておかねばならない。

「あ、私もそれ知りたい」

沖田さんも気になるらしい。

「うむ、なら教えてやろう」

それを聞くと、なぜか嬉しそうに言った。

（ここからはナレーションとして作者：伊藤勇作がお送りします。）

むか〜し、むかし。

といっても、そんなに昔ではありません。

今から約8年前の事です。

あるところに普通……とはちょっと言い難い家族がおったそうなの。

その夫の名前は、月見団御つきみ だんご

妻の名前は、月見秋つきみ あき

息子の名前は、毎度お馴染みのヘタレな主人公。月見優貴と

（優貴：ヘタレ言うな！）

平静沈着だけど、兄の事になると周りが見えない妹。月見皐月  
（皐月：……否定はしない。）

その頃はまだ幼くて可愛げがあり、優貴は今よりヘタレではなく、  
皐月はこの頃から既に兄ラブでした。

（優貴：こちらから）

そんな家族の夫。月見団御は仕事で、中国に旅行に行ったそうなの。

そしてそれと同じ日に、仕事で旅行に来ていた男がいたそうなの。

その男の名前はダイン・シュナイゼル。

クリス・シュナイゼルさんの父親でもある。

月見団御とシュナイゼルが、どうやってであつたのか？

どうして優貴とクリスさん許婚になっているのか？

ここからが、物語の始まり始まり！

登場人物。

\* 月見団御。

\* ナレーション：伊藤勇作。

後は秘密。

\*\*\*

「中国と言つのは意外と広いものだな」

一人の日本人男性が地図を見ながらつぶやく。

彼の名は月見団御。職業はカメラマンだ。



そんな彼が今、重大な決断をしている時だった。

「はて？ 野生のパンダは何処にいるんだ？」

野生のパンダの写真を撮るため、森に入って数時間。  
道が分からない。

「まさか中国に秘境があるとは……恐れ入ったな」

かつこよく言っているが、全然かつこよくない。  
何故なら、意識すれば『ヤベーよ。遭難中しちゃった。てへ』  
と言っているからだ。

「ま、どうにかなるだろう」

月見団御は暢気にそういった。

どうやら、この性格は優貴に受け継がれなかったみたいだ。

（優貴：うるさいよ）

そして何処かの森で遭難して……いつの間にか1週間が経過した。

「くっ、流石の私も腹が減って死にそうだ」

見た目で餓死寸前と分かるくらいに痩せていた。

「どうして森の中なのに……動物が一匹も姿を現さないんだ!？」

どうしてといわれても、現れないものは仕方がない。

「もう植物だけじゃ嫌だ――!――!」

渾身の一撃ならぬ、渾身の『食べ物』への叫び。  
あまりにその声がデカかったんだろうな。

『ガオオオオオオ!!』

何処からか、この声に反応して獣の叫び声が聞こえた。

「むっ!?! あちから肉の声が!?!」

(注意：肉の声ではありません。獣の声です。)

「待っている!! 肉!!」

(いやだから、肉じゃなくて……まあいいか。)

そんなこんなで声のした方向に進んでいくと。

『ガLLLL……』

なんと一般人が肉に襲われているではないか!!

(注意：肉ではありません。トラです。)

ええいごちゃごちゃとうるさいナレーションだな。  
肉でもトラでも変わらんだろうが!!

(いやいや、どう考えても違うだろ。)

細かい事は気ニシナイ。

(あ、こらまで、その台詞はちよいとまずいぞ。)

「早速退治だ！」

などと言いながら、涎が滝のようにでている……トヲをどういった風に見ているのかが、分かりやすいですね。

「トラだろうが！ライオンだろうが！！ゴジラだろうが！！！！……」

なんか腹が減りすぎて団御さんがおかしくなっています。  
あとゴジラは無理があると思いますよ。

「グルルル！」

どうやらトラも襲おうとしている一般人よりも、団御さんの異様な闘争心（尋常な食欲）の方が危険と判断したみたいだ。

「ふっふっふっ……とららー  
一週間ぶりのにくく」

なんかもう目が逝っちゃってますね。

さすがにトラもびっくりして引いちゃってますよ。

「さあ、大人しく飯になれえええええ！！！」

そういいながら飛び掛っていきました。

まあどっちかと言うと『飛び掛った』と言うよりは『襲い掛かった』といった方が適切かもしれません。

「ガルル！？　ゲルアアアアアアアア！！！」

流石にトラも負けません。

なんせ肉食動物ですからね。

因みにさっきのトラの叫びを訳すと。

『俺を食料に！？　返り討ちにしてくれるわ！！！！』

だそうです。

どうやらトラも戦って勝つ気満々ですね。

ここからは、あえて音声のみでお伝えします。

\*\*\*

「おら！！先手必勝！！！」

「ぐるるるる！？（くそ卑怯な攻撃を！？）」

「まだまだ！！！」

「がああああああ！！！！（なら必殺のダイガーファング！！！！）」

「効かねーよ！！！」

「がおおお！！！！（なら打ち砕くのみ！！！！）」

「あまい！！！」

「ぐぐぐぐぐ。 (かかったな)」

「なに!?!」

「ガオオオオ!! (奥義。スラッシュファング!!)」

「こっちも負けるか!! 奥義。爆碎拳!!」

どうやら相打ちだったようだ。

「グルルル…… (お前なかなかやるな……)」

「ふつ、腹が減っていなければ、まだこんな物じゃないぞ」

「グルル、ガアアア!! (なら、さっさと決着をつけてくれるわ!!)」

「上等だ!! かかってこいや!!」

く以下省略く

凄まじい戦いですね。

音声だけでも迫力が……伝わりませんね。

まあ、細かい事は気にしないでください。

つてか、ナチュラルにトラと会話している団御さんも、こいつ人間なのか? って感じですね。

まあ、そんなこんなで数十分に及ぶ死闘の末。

「グ、ググル……」

傷ついたトラが逃げていきました。  
どうやらトラが負けを認めたようです。

「くっ…ま、まて……」

どうやら団御さんもダメージがかかったのか、一步も動こうとしません。

まあ、あれだけ凄い戦いでしたもんね。

「う・うつつつ、待て肉……」

……どうやらダメージのせいで動けないのではなく、ただ単に腹が減って動けなかったみたいです。  
これじゃ、ただの阿呆あほうですね。

「あ、当たり前だ。たかがトラ如きに私が遅れを……」

律儀に説明していたら。

ギュルルルルル

凄まじい腹の音が鳴った。

「くそつ、流石に腹が減った状態でトラを食料にするのは少し手強すぎたか……」

当たり前と言う以前に、普通はトラを食料にしません。

「う、うるさい……ぞ」

その瞬間倒れてしまった。  
どうやら力尽きたみたいですね。  
そんな倒れた団御さんに。

「あの、これをどうぞ。」

先ほど襲われかけていた男性が何かを差し出してきた。

「……………」

どうやら缶詰のようだ。

しかしその缶詰は団御が望んでいた物でもあった。

「ぎゅぎゅうにくー!!」

缶詰は肉であった。

「あ！ありがとうございます！」

団御は救われた。

そしてその男も救われた。

「いえ、こちらの方がお礼を言うべきです!!」

「いやいや、気にしないでください」

確かに気にする必要はないと思いますよ。

団御さんは明らかに『助ける』よりも『食料』を一番に優先していましたし。

「あの、是非お名前を教えてくださいませんか？」

その男性が訪ねてきた。

「うむ、俺の名は月見団御だ。お前さんはなんと言った？」

「あ、私はダイン・シュナイゼルです」

こうして彼らは出会ったのだった。

そして団御は恩人（缶詰）のおかげで助かり、森を抜けて、二人で酒場になだれ込んで飲み明かした。

そうして出来たのが許婚の約束であつた。

『この私、月見団御とダイン・シュナイゼルは

この酒場誓いにより

月見団御の息子。月見優貴と

ダイン・シュナイゼルの娘。クリス・シュナイゼルを

結婚させる事を誓います。

月見団御&ダイン・シュナイゼル 』

くここでおしまい



「……………」

沖田さんは哑然とした。  
だけど頑張って一言だけ言った。

「月見君のお父さんて一体…何者？」

「はあ……………」

僕はため息をついた。

まあ、何となく予想はしてたしね。

まったく。あの人はホントロクな事をしないよな、約束だけ置いて先に消えちまったあの人が恨めしいよ。

『ま、そういうな。これもお前が人として生きるための事だ。どうするかはまで自分で考えろよ』

「…………え？」

一瞬、誰かが何かを言ったような…

「月見君！！ どうするの！？」

「で？おぬしはこれからどうするのだ？」

二人とも僕に聞いてくる。

それ以外は聞こえない。

「…………気のせいだったのか？」

まず、この状況をどうにかしないとな。

その事を考えたら、さらに疲れが増したような気がした。

第貳拾四話：我が道進む、それが父！（後書き）

本来なら一番主人公に近い男、それが月見団御。

また出てくる可能性あり。

ってか、明らかにこいつ主人公だろ……って感じ。

## 第貳拾五話：増えていく厄介事

阿呆な父。団御（自称：我の道に敵無し）のせいで、色々ややこしくなってしまった優貴。

さあ、これからどうする？ どうなる？

頑張れ優貴！

それいけ優貴！

\*\*\*

「ま、まあ、この件は後にして、まずはシュナイゼルさんのホームステイ先に行こうよ」

とりあえず話をちよろまかし、逃げだ優貴であった。  
ヘタレすぎて泣けてきますね。

「……まあ、そうね」

かなり不満そうな沖田さん。

「私はそれでいい。とりあえず休みたい」

シュナイゼルさんも同意した。

「で？ ステイ先の住所は？」

「ここだ」

そう言つて渡された一枚の紙。

「……？」

見覚えがある住所だ。僕の家近くかな？

「とりあえず。バスに乗ろうか」

そして三人はバス乗ってステイ先に行く……。

のはいいのだが、ここでも事件に合うとは思つてもいなかった。

\*現在バスの中\*

中は結構空いていて、前の方に二、三人ほどいるだけ。

僕らは後ろの方に荷物を置き、席に座った。

何だかんだで色々あったけど、どうにか落ち着いたな。

少しだけ、ホツとする。

けど問題は山済みだな。

まず1つめはあの馬鹿（団御）のせいでこうなった事だ。生前から迷惑はかけてたけど、死んでもなお迷惑をかけ続けるとは……恐るべし超絶大馬鹿者（団御のこと）

そして2つ目は、なんと言つても龍之さんや皐月に知られてはならない。

沖田さんに知れただけでこの有様だ。もし、もしだが……あの二人（自称彼女と兄ラブ妹）に知れたなら……

問答無用、殺されるかも？

「違うんです！ 僕じゃないんです！ あいつ（団御）が全ての元凶なんです！！」

「月見君……？」

「……あ」

思いつき声に出していた。

周りの人。といっても少しだけだが、その人達の視線が痛い。

「大丈夫？ その……脳とか？」

「……大丈夫じゃないかも」

主に精神が。

「そうか？ なら私が」

すかさずシュナイゼルさんが言うが。

「あなたがすると、余計にややこしくなります」

ちよつと棘のある言い方で止める沖田さん。

「なので、私に任せれば大丈夫よ」

ちやつかりと自分でやろうとしている沖田さんだが。

「大丈夫？　大丈夫なわけないだろ、馬鹿かお前は？」

物凄くストレートで言うシュナイゼルさん。

せめて、もう少しソフトな言い方をしてください。

「そしてこの結果」

「……………」

「……………」

さっきまでの平凡な空気が、ちょいとやばげな雰囲気になりましたとき。

なんでだろ、僕の関係ないところで話しが勝手にややこしくなっていく。

「……………」

「……………」

沖田さんとシュナイゼルさん。両者のにらみ合いが続きます。

喧嘩するのはかまいません。けど僕を巻き込まない範囲でしてほしいです。

「お前は私に喧嘩を売ってるのか？」

「そちらこそ、それに私は『お前』じゃなくて、沖田歩美と言う名前があります」

「私もクリス・シュナイゼルと言う名前がある」

「なら今後ともよろしく」

「こちらもな」

二人の視線でバチバチ火花が飛び散ってます。

このままではこの火花のせいで、僕にとばっちりがくる。  
今までの経験がそうであったように！！（断言）

「ここは、援軍を要請するか」

こんな時に一番頼りになりそうな人物。

といつても、僕の友達の数なんて極端に少ないから、どの道、賢治  
しかないんだけどね……  
自分で言っててなんか悲しくなってきた。

「まあ、気を取り直してメールを打つか」

ピ・ポ・パ・ポ・ピ……………っと。

打った結果。

『緊急事態発生です。至急応援を……………今すぐ助けに来て！ 僕だけ  
じゃあ無理です！』

うーん、なんか微妙に大げさになったかもしれない。  
あながち間違いではないけど……………これはどうかな？

「……………まあ、細かい事は気にしない、気にしない」



送信ッと。

「……………あの」

「ん？」

何だか呼ばれたようなきが……

「あの、すみません」

携帯から目を離し、呼ばれたほうをみてみれば……  
いつの間に知らない女性が立っていた。  
多分僕らと同年代。

先ほど前の席にいた人の一人だと思う。  
そんな人が何でここに？

「あの、月見優貴君……………ですよね？」

「まあ、そうですけど……………」

なんで僕の名前を？

「み」

「み？」

「宮田賢治君に、会わしてくださいー!!」

「……………は？」

さらなる厄介ごとが増えたのは言うまでもない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7548c/>

---

僕の彼女は極道さん .

2010年10月9日23時18分発行